

中学校における「春はあけぼの（枕草子）」の授業改善

—小学校との接続を視野に入れて—

Class Improvement of “In Spring, the Dawn (Makura no Soushi/The Pillow Book)” in Junior High School

—In View of the Connection with Elementary School—

吉田 茂樹（高知大学教育学部）

武久 康高（高知大学教育学部）

渡邊 春美（高知大学名誉教授）

今村 有紀（高知大学教育学部附属中学校）

YOSHIDA, shigeki (*Faculty of Education, Kochi University*)

TAKEHISA, yasutaka (*Faculty of Education, Kochi University*)

WATANABE, harumi (*Honorary professor of Kochi University*)

IMAMURA, yuki (*Junior High School Attached to the Faculty of Education, Kochi University*)

ABSTRACT

This study aims for junior high school class improvement of “Haru-wa, Akebono/In Spring, the Dawn (Makura no Soushi/The Pillow Book)” which has been adopted in all the textbooks for elementary and junior high school and has become an overlapping teaching material. In this practice, first, the characteristics of the way of expressing in “Haru-wa, Akebono/In Spring, the Dawn” are identified by comparing it with the “Kokin Wakashu/A Collection of Ancient and Modern Japanese Poetry”. Next, using the ways of expressing that have been identified, activities of “imagining the personality of Sei Shonagon” who is the author are developed. Finally, assuming to have become the pseudo-“Sei Shonagon figure” established, an essay is created. Specifically, one theme is selected from “Tsumetaki-mono/cold things”, “Osoroshiki-mono/frightening things”, and “Nakeru-mono/things that make me cry” and a piece of work is created with each person creating one sentence and this being tied together by working in a group of four. Based on these activities, we attempt to realistically comprehend the perspective of the “thoughts and views of Sei Shonagon”.

1 研究の背景と課題

(1) 小学校・中学校・高等学校の教科書に重複する共通教材の出現

平成 20 年に改訂された小学校・中学校学習指導要領、及び平成 21 年に改訂された高等学校学習指導要領において、〔伝統的な言語文化に関する事項〕が新設された。この改訂を受けて、小学校の教科書には〔伝統的な言語文化〕の教材として、これまで中学校と高等学校との教科書においてすでに重複が指摘されていた、「春はあけぼの（『枕草子』初段）」が、さらに採録される状況となった。

平成 29 年度時点で、小学校・中学校の教科書会社五社は、全社とも「春はあけぼの」を両校種の教科書に重複して採録している。掲載学年、単元名は以下の通りである。

①東京書籍

小 5 日本の言の葉 古文に親しもう

中 2 伝統文化を楽しむ 枕草子・徒然草

②学校図書

小 5 随筆を書こう わたし風「枕草子」

中 3 発見する言葉―枕草子

③三省堂

小 6 自由な発想で―随筆―

中 2 古典に学ぶ（枕草子・徒然草）

④教育出版

小 6 日本語のひびきを味わおう 春はあけぼの

中 2 随筆の味わい―枕草子・徒然草―

⑤光村図書

小 5 季節の言葉（帯単元となっている：吉田注）

中 2 枕草子

このような経過で、小学校・中学校・高等学校の教科書に同一作品の同一部分が「古文の共通教材」として重複して採録される状況が出現することとなった。

(2) 共通教材を何度も同じ方法（言語活動）で学習させる授業の出現

小学校の教科書会社五社の教師用指導書では、「春はあけぼの」に関しては、全社とも「B 書くこと」領域の指導事項と関連づけられている。具体的には、三省堂以外の東京書籍・学校図書・教育出版・光村図書において、単元のゴールに「春はあけぼの」を随筆のモデルとして自分なりに書き換える活動が設定されている。三省堂では、単元名「自由な発想で―随筆―」で随筆を書く活動の中に「春はあけぼの」を読むことが参考として位置づけられている構成となっている。

中学校の教科書会社五社の教師用指導書でも、学校図書以外の東京書籍・三省堂・教育出版・光村図書において、「季節の随筆を書く（「超訳」を含む）」活動が、単元のゴールに設定されている。これらの教科書・教師用指導書

の構造が、「同一作品の同一部分を何度も繰り返し同一の方法（言語活動）で学習させる」形態の授業が出現する一つの原因になっていると考えられる。

学習者の発達段階に合わせて身につけさせるべき力が設定されていれば、理論的には、小学校・中学校・高等学校において教材が重複していることや、同様の言語活動が展開されていること自体に問題はない。しかし、実際に「同一作品の同一部分を同一の方法（言語活動）で繰り返し学習させる」授業を受ける学習者の立場からすると、「また同じ授業か…」と、最初から内容に新鮮味が感じられないという点に課題がある。

2 研究の目的と方法

本研究では、最終的に、小学校・中学校・高等学校の発達段階をふまえた「古文の共通教材の段階的・系統的な指導カリキュラム」を提案することを目指している。同一の作品に対して、学年が進むごとに児童生徒が「新しい価値に気付く」ことのできる指導法を開発し、具体的な授業モデルとして発信していく。

本稿の目的は、「古文の共通教材」の内から、中学校実践における『枕草子』初段の「春はあけぼの」を取り上げ、小学校から高等学校までを見通した新たな視点を持った授業として提案することにある。

本実践においては、「春はあけぼの」における表現の仕方を『古今集』と比較しながら読み取ることで、作者である「清少納言の人物像を想像する」活動を通して、「清少納言のものの見方や考え方」の観点を理解させるという方法でアプローチする。

3 中学校実践において「春はあけぼの」が持つ課題と解決へのアプローチ

前述したように「春はあけぼの」は小学校・中学校における教科書会社全社が採録しているため、中学校においては生徒全員が二回目の学習として取り組むことになる。導入として小学校で学習したことを参考にしながら、中学校ではより難度の高い学習に取り組ませることで、同一作品の同一部分を学習することへの興味・関心を高めたい。

ここでは、中学校実践において「春はあけぼの」が持つ課題を(1)(2)で挙げた後、(3)として今回高知大学教育学部附属小学校で授業化するための視点を課題解決へのアプローチとして提示する。

(1) 音読や朗読と書き換えを中心とした指導への疑問

① 音読や朗読を中心とした指導への疑問

平成 20 年に改訂された中学校学習指導要領では、第 1 学年及び第 2 学年の〔伝統的な言語文化〕の指導事項(7)で、音読や朗読などにより古典の世界に「触れる（実感的

に知覚する)」ことや「楽しむ（興味・関心を深める）」ようにすることが目指されている。具体的には、第1学年「文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること」、第2学年「作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと」がそれに該当する。中学校学習指導要領解説国語編に述べられているように、音読の効果が「その独得なリズムに気付かせる（第1学年）」ことにあり、朗読の効果が「作品について新たな発見をしたり興味・関心を深めたりする」ことにあるとする考えに異論はない。小学校において音読や暗唱を通して「知る（理解する）」ことができた古典の世界を、中学校においても音読や朗読を通して「触れる（実感的に知覚する）」「楽しむ（興味・関心を深める）」に深めていく指導は不可欠であると考えられる。しかし、音読や朗読の活動が指導事項として提示されているため、「音読や朗読自体が目的となっている授業」が行われがちなのも現実である。音読大会や朗読大会を単元のゴールで行って事足りりとする指導には、それで本当に「春はあけぼの」を読んだことになるのかといった疑問を感じる。

② 書きかえを中心とした指導への疑問

小学校と同じく中学校においても、[伝統的な言語文化]の指導は、「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」の三領域との関連を考慮して実践することが学習指導要領でも明記されている。通常、「春はあけぼの」を授業化する際には、第2学年[伝統的な言語文化]の指導事項(ア)「作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと」を基盤に、(イ)「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」を中心として、三領域との関連を持たせた指導過程を構想することになる。

教科書会社五社の教師用指導書では、「春はあけぼの」に関しては、全社とも「C読むこと」領域と関連づけた単元を構想している点は共通している。全社における全指導事項の設定は以下の通りとなっている。

①東京書籍 B(1)ウ C(1)エ 伝国ア(イ)

②学校図書 A(1)アイウエ B(1)アイウ C(1)アイウエオ 伝国ア(ア)(イ) イ(ア)(イ) ウ(ア)(イ)

③三省堂 C(1)エ 伝国ア(イ)

④教育出版 C(1)エ 伝国ア(イ)

⑤光村図書 B(1)イウ C(1)イエ 伝国ア(ア)(イ)

全社ともに C(1)エと伝国ア(イ)を共通して指導事項に設定していることが分かる。つまり、「春はあけぼの」においては、全社が基本的に「C読むこと」の「エ 文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること」と関連させることで、「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを

想像すること」を指導の中心に設定しているのである。

前述したように、教科書会社五社の教師用指導書では、学校図書以外の東京書籍・三省堂・教育出版・光村図書において、「季節の随筆を書く（「超訳」を含む）」活動が、単元のゴールに設定されている。「春はあけぼの」を随筆のモデルとして書きかえる活動の意義について、たとえば東京書籍の教師用指導書では「筆者のものの見方、考え方を的確に捉えたうえで、見聞きしたことや体験したことを挙げ、随筆を書くこと(p.36)」ができると説明されている。他社の教師用指導書もほぼ同様の記述である。書き換えることによって、元の作品（文章）の内容や形式を自然な形で身につけていきながら理解をより深める指導を行なうことに異存はない。しかし、たとえば東京書籍の教師用指導書に例示されている、以下のような文章を書くことによって、「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」が達成されたことになるかどうかは疑問である。

春は日中。柔らかな日だまりを背に受けながら、ままだろむ時間は何とも言えない。昼休み、友達とたわいもない話をしながら、暖かな陽光を感じる。春だなあ……としみじみ思う。町の猫も日なたに寝転び、くつろいでいる。寒く閉ざされていた冬からの解放。全身で感じる生命の芽吹き。(p.42-43)

同社の小学校の教師用指導書に掲載されている、「春はあけぼの」の書き換えモデルと同様、元の作品との関係性は季節をテーマとした随筆という点以外見当たらない。このような季節をテーマとした随筆を書かせることが目的であるのならば、現代文の随筆をモデルとする方法も考えられる。書き換えることで、「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」ができるように、元の作品（文章）の内容や形式を効果的に用いる工夫が必要であると考えられる。

(2) 「古典に表れたものの見方や考え方」「作者の思い」の設定への疑問

「春はあけぼの」の授業が、第2学年[伝統的な言語文化]の指導事項(イ)「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」を中心として構想されるのであれば、当然、教えるべき内容の基盤である「古典に表れたものの見方や考え方」「作者の思い」が何かを設定する必要がある。ここでは、高知大学教育学部附属中学校で使用している、光村図書の教科書と教師用指導書の内容を中心に考察する。

まず、「作者」に関しては清少納言を指すものとして間違いない。次に、「古典に表れたものの見方や考え方」「作

者の思い」は、中学校学習指導要領解説国語編では「密接な関係(p.59)」にあるとして、「登場人物や作者の思いを豊かに想像することを通して、文章を貫くものの見方や考え方に触れることもある(p.59)」と説明されている。つまりは「清少納言のものの見方や考え方を実感する」ことが目指されていると理解できる。「春はあけぼの」においては、「清少納言の季節に対するものの見方や考え方」を実感することが目指されるということになる。

いずれの教科書も、「春はあけぼの(枕草子)」を随筆として扱っている。すなわち、「自分の見聞・体験・感想などを、思うままに自由な形式で書き綴った文章」という随筆の定義に則り、「春はあけぼの」に述べられている内容は、すべて書き手である「清少納言のものの見方や考え方」であるはずだと解釈される。その「清少納言のものの見方や考え方」を示すために、教師用指導書では『『枕草子』』には、当時の文化人の高い美意識が反映しているといえるだろう。特に、この、『春はあけぼの』の段にみられる季節や時間の捉え方は、日本文学に特徴的な繊細な感覚をよく表している(p.75)」と説明されている。

しかしながら、このようにとらえると、「春はあけぼの」には「当時の文化人の高い美意識」により支えられた自然観が表現されており、それは日本人特有な繊細なものの見方や考え方であるということになる。そうすると、「春はあけぼの」は、「平安朝一般及び日本人の自然観や美意識等」が書き表されたものとなり、「清少納言の季節に対するものの見方や考え方が表出されたものとは言えなくなってしまうという矛盾がある。

ここでは、小学校実践と同様に、「清少納言の季節に対するものの見方や感じ方」と「平安朝一般及び日本人の自然観や美意識等」とをイコールとは考えない立場を取る。もう一度、「春はあけぼの」の表現に即して「清少納言のものの見方や考え方」をとらえ直す必要があると考える。

(3) 課題解決へのアプローチ

① 音読や朗読と書き換えに関して

(7) 音読や朗読について

本単元では、音読を積極的に指導過程に取り入れていくこととする。ただし、音読すること自体を目的とはせず、学習課題を達成するための方法として積極的に活用していく。音読することを通して、古文特有のリズムを味わいながら「春はあけぼの」に触れることを目指している。各授業の最初と最後を使って音読と暗唱に取り組み、単元終了時には生徒全員が「春はあけぼの」の全文を暗唱できるようになることを目指す。各授業の開始時と終了時に全員で様々な方法で音読や暗唱を行う場を設定する。開始時の音読には、前時の振り返りと本時の大まかな内容の確認を位置づけている。終了時の音読には、本時における学習課

題の振り返りを位置づけている。

具体的には、第1時においては、時間帯と景物を空欄にした「穴あき音読シート」を音読することで、各季節における一文目の「季節—時間帯」の構造や、季節ごとの四つの段落が「良さを感じる景物」で構成されていることに気づかせる。ゲーム感覚で楽しく音読することを通して、無意識の内に次時からのキーワードとなる言葉に着目させることをねらいとしている。第2時においても「穴あき音読シート」を音読する活動を、「春」と「夏」の構造・構成を理解するきっかけとする。第3・4時は、最終的には暗唱することを目指し、「穴あき音読シート」をペアで音読したり、本文を見ずに教員の暗唱に合わせて復唱したり、全体で暗唱したりする活動を展開する。

(4) 書き換えについて

本単元では、「春はあけぼの」における表現の仕方を読み取ることで、作者である「清少納言の人物像を想像する」という言語活動を単元のゴールとして設定している。まず、清少納言の人物像を想像するために必要な「春はあけぼの」における表現の仕方を読み取る。さらに、読み取った表現の仕方を使い、疑似的に清少納言になって様々に書き換える活動を通して、作者のものの見方や考え方の観点を美感的に理解していくように設定する。

第1時では、まず、各段落(春夏秋冬)の構成が「良さを最も感じる時間帯(結論)—景物の様子(説明)」となっていることを理解させる。さらに、各段落(春夏秋冬)の一文目が、「春—花(桜)」のような『古今集』の通念的な美意識による決まりきった「季節—代表的な景物」の取り合わせではなく、「春—あけぼの」といった「季節—時間帯」という意外性のあるテーマの取り合わせで表現されていることに気づかせる。この表現の特徴を、「清少納言の表現の工夫①」として「当たり前のものはあえて取り上げない」と整理する。その上で、同様の表現の仕方で、生徒一人一人が「季節—意外性のあるテーマ(光・音・色など)」を設定し、通念的ではない自分が発見した季節の景物をクイズ形式で提示し合わせる。

第2時では、「夏」を取り上げる。「夏」にふさわしいとして取り上げられている景物を、「さらなり」「も」「なほ」「また」をキーワードとして、「みんながいいと考えるもの」と「作者が『これもいい』と考えるもの」に識別する。「さらなり」「言ふべきにあらず」「言うべきにもあらず」などのキーワードによって、「みんながいいと考えるもの」と「作者が『これもいい』と思うもの」を識別する方法は武久によるものであり、詳細は次章において説明する。これによって、「春はあけぼの」には『古今集』に表現されている「伝統的な美意識」を踏まえながら、作者が新たに発見して表現した「清少納言の美意識」が提示されていることに気づかせる。その上で、あえて「闇」「雨」をもよ

しとする「清少納言の美意識」を「清少納言の表現の工夫②」として「一般的に好まれないものを評価する」と整理する。その上で、同様の表現の仕方、「夏は真昼。」に続く「一般的に好まれない」が多くの人が納得するようなウィットに富んだ景物を考え、発表し合わせる。

第4時では、「清少納言の表現の工夫①②」という表現の仕方から、「清少納言の人物像」を想像させる。評価項目を「素直さ・教養・表現力・観察力」と設定して考察する活動を通して、作者である清少納言のものの見方や考え方の観点を理解させる。その上で、自分なりに想像した清少納言像になって、「つめたきもの」「おそろしきもの」「泣けるもの」という題で書くとしたら、「清少納言の表現の工夫①②」を使ってどのように表現するのかを、各自が一文で考える。その後、四人班で一つにまとめて共同制作の作品とする。

このように、「春はあけぼの」から読み取った内容や形式を積極的に用いて自分なりに書き換えを行うことによって、生徒たちは、作者である清少納言が、自ら感じ、発見した美を理解すること——つまりは「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」ができるようになると思われる。

② 「古典に表れたものの見方や考え方」「作者の思い」の設定について

本単元の主教材である「春はあけぼの」は、小学校の全ての教科書に採録されているため、生徒全員が二回目の学習として取り組むことになる。既習の教材として、小学校とは別な側面からの教材解釈が必要となる。小学校では「春はあけぼの」と自分のものの見方や感じ方を比較することを通して、清少納言のものの見方や感じ方を読み取ることが中心となる。小学校の学習を受けて、中学校では「春はあけぼの」における美意識と当時の規範となっていた『古今集』の通念的な美意識とを比較することを通して、清少納言の「ものの見方や考え方」「作者の思い」の特徴を読み取ることを中心としている。たとえば、第1時では、「春はあけぼの」における各季節一文目の「春—あけぼの」「夏—夜」「秋—夕暮れ」「冬—つとめて」という取り合わせと、当時の美意識の規範となっていた『古今集』の「春—花（桜）」「夏—時鳥」「秋—紅葉」「冬—雪」という通念的な取り合わせとを比較する活動を行う。

本実践では、「春はあけぼの」には作者である清少納言の美意識が率直に表現されていると考える立場はとらない。その上で、清少納言のものの見方や考え方の特徴を、平安朝一般及び日本人の自然観や美意識を踏まえながら、自らが感じ、発見した美を織り込んだ独自の表現を提示しているととらえる。本実践では、「春はあけぼの」における表現の仕方を、藤本宗利(1984)の考察を援用して、以下の観点から「通念的な概念に対する沈黙」と「非通念的な

ものへの言及」の二点に整理している。

第一に注目すべきものは「沈黙の表現」とでもいうべき方法であろう。それは一言で言えば、ある概念(素材についての、或いは素材の属性についての)が非常に通念的な場合には、それについて敢えて記述しないという逆説的な性格を有している。通念的な概念に対する沈黙とその半面の非通念的なものへの言及(初段においては「鳥」の条などがこれに当る)は、読者の美意識を律している規範性とは相容れないため、読者の感性を感乱させることは必至であった。和歌的伝統に支えられた美意識の硬直性への、烈しい挑発であると言える。

(藤本宗利「空白への視点—『春は曙』の読みをめぐる』紫式部学会『むらさき』第21輯 p.40,1984)

「通念的な概念に対する沈黙」とは、当然書かれるべきものが書かれないことで、かえって読み手にその存在を強く印象づける表現の仕方である。当時の自然観や美意識の規範であった『古今集』によって、「月」「風の音、虫の音」「雪」などを評価する通念的な既成概念が形成されていた。清少納言は、これらの伝統的な美意識に支えられた景物を「さらなり」「言ふべきにあらず」「言ふべきにもあらず」と「みんながいいと考えるもの」として提示している。しかし、「春はあけぼの」には「春—花（桜）」「夏—時鳥」「秋—紅葉」「冬—雪」という、季節と景物を語る上で最も典型的な取り合わせが、「冬—雪」を除いて使用されていない。ここから「当たり前のものはあえて取り上げない」という「表現の工夫①」を読み取ることができる。

「非通念的なものへの言及」とは、当然書かれるべきでないものが書かれることで、かえって読み手にその存在を強く印象づける表現の仕方である。「春はあけぼの」には、『古今集』の規範的な美意識から外れた、「夏の闇夜や雨夜」「秋の夕方に飛び急いでいる鳥」「雪も降らない寒い冬の朝」といった一般的には評価されない景物が提示されている。これらの清少納言が発見した伝統や規範を超えた新たな美を「も」「なほ」「また」「さへ」と「作者が『これもいい』と思うもの」として提示している。ここから、「一般的に好まれないものを評価する」という「表現の工夫②」を読み取ることができる。

以上のような教材の特徴から、本単元では、『古今集』との比較を通し、清少納言の「ものの見方や考え方」「作者の思い」の観点をとらえていく。読み取った「清少納言の表現の工夫①②」の特徴を、自分の知識や体験と関連させることで意味づけることにより、「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」ができるようになると思われる。(吉田茂樹)

4 「春はあけぼの」の構造分析

【分析の観点】

本稿では「春はあけぼの」章段の特徴について、以下の二つの観点から分析する。

①語の使われ方に着目して本文の構造を捉える

「春はあけぼの」章段は、「春はあけぼの」、「夏は夜」、「秋は夕暮れ」、「冬はつとめて」といった、各季節のそれぞれの時間帯における「をかし」き（あるいは「あはれ」な）景物が語られている。本節ではまず、こうした各季節における景物の語られ方の特徴について、「さらなり」や「も」、「言ふべきにあらず」などの語の使われ方から検討する（すでに本稿の小学校編（「小学校における『春はあけぼの』（枕草子）』の授業改善—中学校との接続を視野に入れて—）で論じているため、ここでは要点をまとめることとする）。

②同時代の和歌（主として『古今和歌集』）との関係から本文の構造の特徴を捉える。

周知のように『古今和歌集』四季部では、春のはじめから冬の終わりまでの季節の推移が、それぞれの時節に相当する歳時や景物を詠んだ和歌を配列することによって表現されている。そして当時の貴族や女房たちは、これらの歌を季節に対する美意識の手本として暗記し、学んでいったのである（例えば『枕草子』「清涼殿の丑寅の隅の」章段では、女房たちに『古今和歌集』のテストを行う定子の様子が語られている）。そうした結果、『古今和歌集』を範とした季節感や美意識が人々に形成され、定着していったのである。

では、以上のような『古今和歌集』を範とする季節感や美意識と『枕草子』の表現とは、一体どのような関係性にあるのだろうか。そこで本節では、①で分析した「春はあけぼの」章段の構造の特徴について、主として『古今和歌集』四季部（および参考として、『後撰和歌集』『拾遺和歌集』の四季部）との関係から明らかにする。具体的には、以下にあげた各季節の「素材景物等一覧」と「春はあけぼの」章段で描かれている景物とを比較する。そのことによって、「春はあけぼの」章段の構造の特徴を捉えることとする。

●『古今集』・『後撰集』・『拾遺集』「四季部」

素材景物等一覧

この資料は、『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』の四季部において、どのような景物等が詠まれているかを整理したものである。

《例》桜が、三代集四季部合計で90首（古今集で41首、後撰集で30首、拾遺集で19首）詠まれている場合「桜90（41・30・19）」と表記する。

すでに多くの先行研究が指摘しているように、「春はあけぼの」章段は、『古今和歌集』のみではなく、和漢の類

書や漢詩文の伝統的価値観など様々な言説との関わりによって生み出されている（例えば、中島和歌子『枕草子』初段「春は曙」の段をめぐって—和漢の融合と、紫の雲の象徴性—（『むらさき』41、2004）など参照）。しかし本稿は、中学校での授業を目的とした教材分析という位置づけであることから、本章段との関わりが最も強いと思われる『古今和歌集』との関係に絞り、分析をすすめる。

【分析】

(1) 夏

①語の使われ方から構造を捉える

まずは「春はあけぼの」夏の段落に注目する。「夏は夜」とはじめに時間帯が示された後、次に語られるのは「月のころはさらなり」（「さらなり」＝今さら言うのもわざとらしい。言うまでもない。以下、本節で示す語の意味は、小学館『古語大辞典』による）といった、「夏の夜における『月のころ』の面白さは今さら言うまでもない」ということである。

その後本文では、そうした「月のころ」以外で語り手が「をかし」と思う情景が並べられている。

「闇も なほ螢の多く飛びちがひたる」の「も」とは、「ある事柄の上に、さらに別の事柄を添える意」であり、「なほ」とは「他と同様の事態が生じていること、あるいは同様の判断が成り立つこと」の意である。つまりこの一節は、言うまでもない「月のころ」の「をかし」さに付け加えて、多くの螢が飛ぶ闇夜についても同様の判断（「をかし」）が成り立つ、と語り手が表明している箇所だと指摘できよう。

さらに「また、ただ一つなどほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし」の「また」とは、「（多く助詞「も」を伴って）同様に。やはり」の意であり、「も」とは「同じ趣の事項を列挙する意」である。つまりこの部分は、前文で示した語り手の判断（人口に膾炙した「月のころ」に付け加えて、多くの螢が飛ぶ闇夜も同様に「をかし」きものだという判断）が、「螢がほのかに光る闇夜」や「雨夜」にも当てはまることを表明する語りだと指摘できる。

以上のことから、冒頭の「夏は夜」に続く「月のころはさらなり」については、「さらなり」という語から「みんながいいと考えるもの」を表現した箇所として、それ以降の情景については、「も」や「なほ」「また」という語の使われ方から「作者が『これもいい』と考えるもの」を表現した箇所として、それぞれ捉えることができよう（分析用語としては「語り手」がふさわしいが、中学校での授業を考慮してここでは「作者」としている）。

②和歌との関係から特徴を捉える

●『古今集』・『後撰集』・『拾遺集』「四季部・夏」

素材景物等一覧

- 【植物】卯の花 15（1・7・7）、藤 7（1・0・6）、橘 6（3・2・1）、撫子 6（0・5・1）、以下略
- 【動物】時鳥 85（28・30・27）、蟬 4（0・3・1）、鶯 2（0・1・1）、夏の虫 2（0・2・0）、鹿 2（0・0・2）、鶺鴒 1（0・1・0）、螢 1（0・1・0）
- 【天候気象等】五月雨 10（2・4・4）、月 9（1・8・0）、風 3（2・0・1）、露 2（1・1・0）、雲 2（1・1・0）、闇 2（0・0・2）
- 【場所等】山 37（13・7・17）、垣 13（0・8・5）、宿 8（2・0・6）、里 5（2・0・3）、以下略

《特徴》

夏の段落で描かれている「月」（9首）や「闇」（2首）、「螢」（1首）、「雨」（「五月雨」で10首）は、その多寡こそあるが、すべて三代集夏部で詠まれているモチーフである。

だが、このうち「月」だけは、「月のおもしろかりける夜、暁方によめる」という詞書のもと、『古今和歌集』夏部においても詠まれている（「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ」古今集・166・深養父）。前述したように当時の貴族層における『古今和歌集』の存在とは、彼らの持つ美意識の範とでもいうべきものであった。『枕草子』においても、定子の口から「村上天皇の御代、宣耀殿女御は『古今和歌集』を完璧に暗記していた」というエピソードが後宮の理想的なありようとして語られ、それゆえ定子は女房たちに対して『古今和歌集』のテストを行う（「清涼殿の丑寅の隅の」章段）。ここからは、「宮廷にいる女御や女房たちは、暗記するぐらいに『古今和歌集』に親しんでおくべきだ」といった認識が窺えるが、こうした当時の規範意識のもと夏の段落では、『古今和歌集』にもある夏の夜の「月のころ」の美が「さらなり」と評されていると考えられよう。

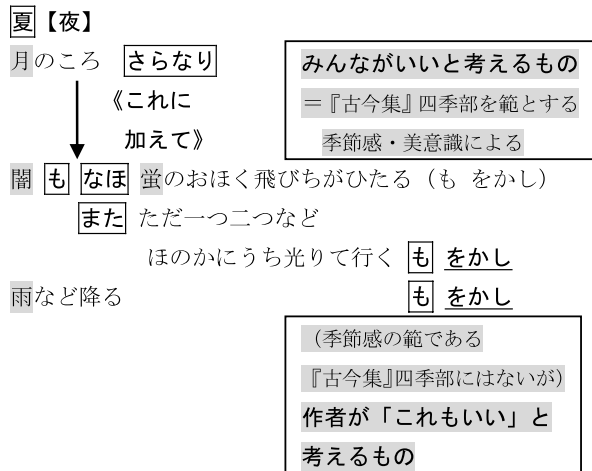
一方、「闇」や「螢」といったモチーフは、『古今和歌集』夏部においては取りあげられていない。また「雨」についても、『古今和歌集』夏部で詠まれているのは「雨」ではなく、「時鳥」と組み合わせられた「五月雨」である（「五月雨に物思ひをれば時鳥夜深く鳴きていづち行くらむ」古今集・153・紀友則、「五月雨の空もどろに時鳥なにを憂しとか夜ただ鳴くらむ」古今集・160・紀貫之。ちなみにこれらの歌は『古今和歌六帖』では「ほととぎす」の標目のところにある（4441・4427）。ここからも、「五月雨」ではなく「ほととぎす」の歌として両歌は詠まれたものだと考えられる）。

このように「闇」や「螢」、「雨」は『古今和歌集』夏部での主要なモチーフとなっていない。ここから『枕草子』は、これらのモチーフについて、「月」ほどには「夏の夜」の典型的な景物ではないと判断したのではないだろうか。

そのため、「さらなり」ではなく「も」や「なほ」の語とともにこれらのモチーフは語られていると本稿では考えておきたい。

ところで、この一覧からも明らかなように、『古今和歌集』をはじめ三代集の「夏」の部で圧倒的に詠まれているのは「時鳥」である（夜と分かる歌（32首）においても時鳥は20首で詠まれている）。しかし『枕草子』夏の段落では、この「時鳥」については取りあげられていない。ここに『枕草子』「春はあけぼの」章段の特徴の一つを見て取ることができよう。

【構造図】夏の段落



(2) 冬

①語の使われ方から構造を捉える

夏と同様の構図は冬の段落にも見ることができる。冬の段落がいう「みんながいいと考えるもの」とは、「言ふべきにもあらず」（言うまでもない）との表現から「雪の降りたる」情景だと言える。また、その後の情景は、「霜のいと白き**も**」の「も」（「ある事柄の上に、さらに別の事柄を添える意」）、「**また** さらでも、いと寒きに火など急ぎおこして炭もてわたる**も**」の「また」（「同様に」の意）や「**も**」（「同じ趣の事項を列挙する意」）などの使われ方から、夏の段落と同様に「作者が『これもいい』と考えるもの」を語っていると解釈できる。

②和歌との関係から特徴を捉える

●『古今集』・『後撰集』・『拾遺集』「四季部・冬」

素材景物等一覧

- 【植物】紅葉等 16（2・7・7）、梅 7（4・1・2）、松 6（1・2・3）、以下略
- 【動物】鴨 5（0・3・2）、鴛鴦 4（0・1・3）、鶴 2（0・1・1）、にほどり 2（0・2・0）、千鳥 2（0・0・2）、鶯 1（0・1・0）、水鳥 1（0・0・1）、鹿 1（0・0・1）
- 【天候気象等】雪 69（23・27・19）、時雨 22（1・16・5）、氷 16（1・6・9）、霜 10（0・5・5）、以下略
- 【場所等】山 27（6・13・8）、里 7（4・1・2）、池 7

(0・3・4)、河7(3・2・2)、以下略

《特徴》

一覧から窺えるように、冬の代表的な景物は「雪」(69首)や「時雨」(22首)、「氷」(16首)などである。『枕草子』の冬の段落では、まず「雪の降りたる」情景を「言ふべきにもあらず」と語っているが、そうした語りの背景には、叙上のような『古今和歌集』四季部を規範とする認識の存在が指摘できよう。

また、冬の段落には「霜」も登場する。しかし「霜」は『古今和歌集』冬部においては詠まれていない(『後撰和歌集』から詠まれ出している)。そのためであろうか『枕草子』では、「霜」の情景は「さらなり」や「言ふべきにもあらず」といった語とともに語られていない。こうした特徴は夏の段落とも一致している。

つまり本段落では、「言うまでもない」冬の朝の雪の様子が語られた後、前述のように「霜のいと白きも」の「も」、「また」さらでも、いと寒きに火など急ぎおこして炭もてわたるも」の「また」や「も」などが用いられて“霜”の白き朝”や“寒き”朝”に炭を運ぶことも「つきづきし」と語られていくのである。

【構造図】冬の段落

冬【つとめて】

雪の降りたる 言ふべきにもあらず

《これに
加えて》

みんながいいと考えるもの
=『古今集』四季部を範とする
季節感・美意識による

霜のいと白き も

また さらで も いと 寒きに

火など急ぎおこして 炭もてわたる いとつきづきし

(季節感の範である

『古今集』四季部にはないが)
作者が「これもいい」と
考えるもの

(3) 秋

①語の使われ方から構造を捉える

秋の段落では、「秋は夕暮」と時間帯が示された後、「鳥の寝所へ行くとて」「飛びいそぐさへあはれなり」といった情景が語られている。そもそも秋の夕暮れとは、「いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり」(古今集・恋一・546・よみ人しらず)などと詠まれるように、人恋しく、何となく「あはれ」な感情を誘う時間帯とされていた。そんな秋の夕暮れに「鳥」が飛びいそいでいる。ここではそんな様子「さへ」「あはれなり」と語られているのである。ちなみに「さへ」とは「ある事物の上にさらに他の事物を添加する意」を表し、「…までも」と訳すことができる。つまり、“秋の夕暮れという時間帯によって、「鳥」が寝所へ行く様子までも「あはれ」を感じ

じる”といったことが示されているのである。「鳥」という「みんながいいと考えるもの」ではない情景から、「作者」が「あはれ」さを見つけ出している様子として捉えておきたい。

その後、秋の段落は「まいて」(「なおさらのこと。いわんや」の意)という副詞とともに「雁などのつらねたる」様子が語られている。あの「鳥」でさえ「あはれ」を感じる秋の夕暮れなので、「雁などのつらねたる」様子なんかはなおさらのこと「あはれ」を感じるといった意であろう。また、「風の音、虫のね」については「言ふべきにもあらず」(言うまでもない)と評されている。つまりこれら(「雁」「風の音、虫のね」)は、「鳥」の情景とは対照的に、「みんながいいと考える」情景としてここでは語り出されていると言えよう。

②和歌との関係から特徴を捉える

●『古今集』・『後撰集』・『拾遺集』「四季部・秋」

素材景物等一覧

【植物】紅葉等 129 (52・56・21)、女郎花 43 (13・21・9)、萩 30 (11・14・5)、菊 26 (13・11・2)、草 20 (5・12・3)、木の葉 12 (7・3・2)、以下略

【動物】雁 36 (13・17・6)、虫 20 (6・9・5)、鹿 13 (7・4・2)、ひぐらし 7 (2・5・0)、きりぎりす 5 (3・2・0)、以下略

【天候気象等】露 75 (19・48・8)、風 72 (20・37・15)、月 38 (8・23・7)、霧 23 (6・11・6)、雲 12 (2・7・3)、時雨・雨 10 (4・5・1)、以下略

【場等】山 78 (29・33・16)、野 41 (14・21・6)、天の川 31 (7・19・5)、河 18 (8・4・6)、宿 16 (7・6・3)、以下略

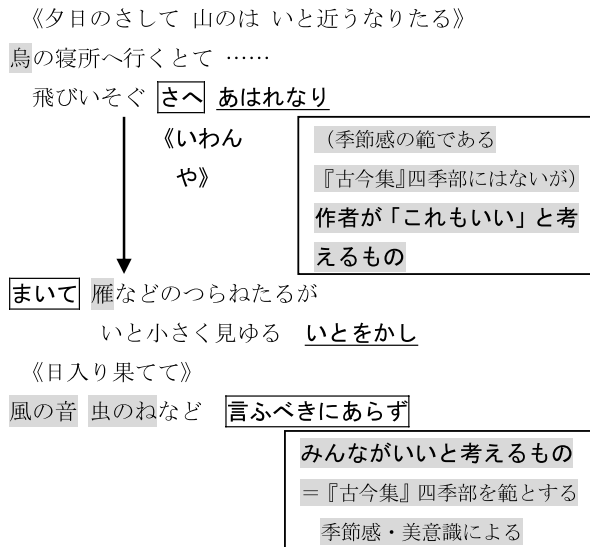
《特徴》

秋部の和歌で多く詠まれているのは「紅葉等」(「色づく」などの表記も含む)(129首)や「露」(75首)である。しかしこれら典型的と言える秋の景物は、夏の段落と同様、『枕草子』では取りあげられていない。

一方、『古今和歌集』等で多く詠まれている「雁」や「虫」、「風」といった景物については、「言ふべきにあらず」や「まいて」という言葉とともに取りあげられている。しかし「鳥」は、三代集の秋部において詠まれていなかった。つまり「鳥」は和歌的な季節感や美意識とは無縁のモチーフであると言えるが、『枕草子』ではそうした景物にも「あはれ」を見出して語っているのが特徴だと言えよう(「鳥」は漢詩文では「孝鳥」としても描かれており、先行研究ではそうした影響が指摘されている(津島知明・中島和歌子編『新編 枕草子』おうふう、2010、当該箇所頭注など参照))。

【構造図】秋の段落

秋【夕暮】



(4) 春

①語の使われ方から構造を捉える

春の段落は他の季節と異なり、一つの情景（「やうやうしろくなり行く山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる」）しか描かれていない。そしてそれは、他の季節にあった「さらなり」や「言ふべきにあらず」という表現が使われていないところから、「作者が『これもいい』と考えるもの」のみを描いたと考えることができる。つまり『枕草子』の巻頭をかざる春の段落では、例えば「桜」や「霞」など、春の情景として「みんながいいと考える」であろうものは省かれ、あえて「作者が『これもいい』と考えるもの」のみを語っているのである。ここには読者にインパクトを与える効果が読み取れるが、当時の規範的な美意識に合わせるのではなく、自分がいいと思うことを書くといった『枕草子』の特性が端的に表れた箇所だと指摘できよう。

②和歌との関係から特徴を捉える

●『古今集』・『後撰集』・『拾遺集』「四季部・春」

素材景物等一覧

【植物】桜 90（41・30・19）、花 88（34・39・15）、梅 50（18・19・13）、若菜 18（6・8・4）、山吹 14（5・4・5）、柳 12（3・5・4）、松 12（2・7・3）、藤 10（2・8・0）、以下略

【動物】鶯 40（20・11・9）、雁 6（2・2・2）、蛙 4（1・2・1）、以下略

【天候気象等】風 43（17・16・10）、霞 35（13・12・10）、雪 25（9・7・9）、春雨・雨 13（5・7・1）、春の日・光 9（2・7・0）、雲 7（1・5・1）、以下略

【場等】山 49（22・14・13）、野 23（10・7・6）、宿 18（5・7・6）、里 17（8・2・7）、以下略

《特徴》

一覧から窺えるように、春の代表的な景物は「桜」（90

首）、「花」（88 首）、「梅」（50 首）、「風」（43 首）、「鶯」（40 首）、「霞」（35 首）などである。夏や秋の段落と同様、こうした特に典型的と思われる景物を描かないところが「春はあけぼの」章段の特徴と言えるだろう。

一方、『枕草子』春の段落で描かれる「山」（49 首）や「雲」（7 首）も『古今和歌集』をはじめ三代集春部に見られる景物である。しかし各歌集では、「紫だちたる雲」等が詠まれていないところから、春の段落との関係はないと考えたい。ちなみに『枕草子』と同様に「春の朝」の「山」とともに詠まれている景物とは「紫だちたる雲」ではなく「霞」である。

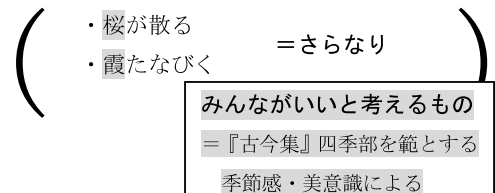
○春立つといふばかりにやみ吉野の山も霞みて今朝は見ゆらん（拾遺集・1・壬生忠岑）

○吉野山峰の白雪いつ消えて今朝は霞の立ち変はるらん（拾遺集・4・源重之）

いずれにしろ、『古今和歌集』はおろか『後撰和歌集』『拾遺和歌集』で詠まれている春の典型的な景物は『枕草子』春の段落では用いられていない。そして、「作者」が考える「これもいい」というモチーフのみが描き出されているのである（春の段落に見られる「紫の雲」や「朝雲」という表現については、先行研究で様々な読みが提出されている。しかし今回の中学校の授業では扱わないため、ここでは触れない。なお「紫の雲」や「朝雲」の用例については、前掲『新編 枕草子』（おうふう、2010）当該箇所補注が分かりやすくまとめてあり便利である）。

【構造図】春の段落

春【あけぼの】



【参考】春の朝に花の散るを見（仮名序）

・恋しさも秋のタベにおとらぬは霞たなびく

春のあけぼの（和泉式部統集・一八八）

やうやうしろくなり行く 山ぎは すこしあかりて、
紫だちたる雲のほそくたなびきたる

（季節感の範である
『古今集』四季部にはないが
作者が「これもいい」と考
えるもの

以上から、『枕草子』「春はあけぼの」章段の特徴を次のように整理したい。

(1) 当時の貴族や女房たちの季節感や美意識の範となった『古今和歌集』四季部で取りあげられている景物について、

「さらなり」や「言ふべきにあらず」などの言葉とともに描いている。しかし春夏秋冬の段落に関しては、「桜」や「時鳥」、「紅葉」といったその季節や時間帯における代表的な景物について取りあげていない。

(2)その一方で、『古今和歌集』四季部で取りあげられていない景物についても、「も」や「また」「さへ」などの語とともに描いている。

(3)これらのことから『枕草子』「春はあけぼの」章段は、『古今和歌集』四季部に基づく規範的な美意識や季節感の存在について認識しつつも、そこは異なる景物の「をかし」さにも目を向けている。そこに本章段の特徴を認めることができる。

(武久康高)

5 授業の実際

(1)第1時

①授業の概要

「小学校との接続を視野に入れて」という研究であったので、授業の最初に、「枕草子」について小学校でどのような学習をしたのかについて生徒に尋ねてみた。すると、ほとんどの生徒の記憶に残っていないことがわかった。当初は、導入で穴あき音読シート表面の()に入る語句を各自で考えて記入させ、穴埋めしていない裏面を見て音読練習をする予定であった。しかし、このような生徒の実態に合わせ、まず教科書を参照しながら音読シートの()を埋めさせ、その上で穴埋めした表面を見ながら、教師の範読に続いて追読させることにした。

この時間の目標は、各季節の一文目の特徴を読み取る活動を通して、「当たり前のはあえて取り上げない」という「清少納言の表現の工夫①」を理解することである。初めに、現代における定番の季節の景物を設定することにした。生徒たちは意欲的に発言し、「春—桜」「夏—海」「秋—紅葉」「冬—雪」とすんなり定番が決まった。そして、「古今和歌集」の四季の歌を使って参照し、平安人における定番が「春—桜」「夏—時鳥」「秋—紅葉」「冬—雪」であったことを確認した。夏以外は自分たちと同じで、生徒たちは納得した様子であった。「夏—時鳥」については「時鳥は夏を知らせる鳥として親しまれ、当時の人は鳴き声を愛でていた」と補足説明をした。

その上で、「春はあけぼの」の各季節の一文目に注目させ、「季節—景物」ではなく、「季節—時間帯」という意外なテーマの提示がなされている特徴に気づかせた。これを「清少納言の表現の工夫①」として「当たり前のはあえて取り上げない」と整理した。さらに、この「表現の工夫①」をまねて、現代における「季節—良さを最も感じる()」を表現するのにふさわしい新しいテーマを選択し、四季の一文目と、具体的な景物の様子を考えさせた。先だって教師が「花の色」をテーマとしたモデルを示し、

生徒たちにはテーマの選択肢として「光」「音」「色」「香り」「擬声語・擬態語」「その他(自由に設定)」を提示した。

(教師のモデル)

春は黄。野に咲く菜の花やタンポポ。

夏は紫。軒先の植木鉢に咲く朝顔。

秋はピンク。秋空の下に広がる一面のコスモス畑。

冬は赤。冬枯れした風景の中に咲く椿。

「当たり前のはあえて取り上げない」という特徴から、テーマだけでなく、景物も一番に頭に浮かぶものは選ばないようにした。生徒は、モデルを示したこととテーマを選択させたことで、どのようなことを書けばよいのかはわかったようであったが、具体的な景物の様子が浮かばず苦戦していた。

計画では、グループ内で「具体的な景物の様子」をクイズ形式で発表させるつもりだった。たとえば、「私は『花の色』というテーマで、『春は黄』としました。具体的にどんな風景や景色を設定しているでしょう？」などと当て合う形式の活動である。「当たり前のはあえて取り上げない」という「表現の工夫①」の特徴から、「春—桜」などというありきたりな組み合わせではなく、「春—黄」というような意外な組み合わせを提示して見せる、謎解きのような表現のおもしろさを実感させようとした。しかし、残念ながら、時間が不足したためこの部分は実施できなかった。

②生徒作品例

(テーマ：鳥の色)

春は茶。庭の柵にとまるヒバリ。

夏は青。きらきら光る川を飛ぶカワセミ。

秋は黒。木に穴を空けているキツツキ。

冬は白。湖にくちばしをつけるツル。

(テーマ：部活動)

春は出会い。新しいメンバーで新たなスタート。

夏は団結。夏のコンクールに向けて励まし合う。

秋は別れ。引退する先輩と最後のステージ。

冬は戦い。新入部員を集めるために作戦を立てる。

③考察

まず、ほとんどの生徒が小学校時の「枕草子」の学習について記憶に残っていなかったことに驚いた。四時間で清少納言の表現の工夫を読み取るとともに、暗唱もできるように授業計画を立てていたのだが、難しいことがわかり、音読・暗唱指導については進度を遅らせることにした。

最後の表現活動では、ねらいとしている表現ができている、特に四季でできている生徒は少なく、1～2つの季節でできている生徒が半数強であった。テーマで「その他」を選び、出来上がった作品の一文目が景物になってしまっている生徒が4分の1くらいいたので、「当たり前のもの

はあえて取り上げない」の意味が分かっていないと感じた。また、「テーマ」と「具体的な景物の様子」、両方にひねりを入れる——つまり、「テーマ」と「具体的な景物の様子」の両方に「当たり前のものはあえて取り上げない」という特徴を反映させる、ことは難しかったようである。

クイズ形式で発表し合う時間が取れなかったので、後日、よくできているものを取り上げ、教師が出題者となって学級全体でクイズ形式にし、正解は制作者に発表させた。答えを聞いて、「ああ～、なるほど」「それは（出題を聞いただけでは）わからん」などの反応があり、大いに盛り上がった。生徒はクラスメイトがどのような作品を作ったのかに強い興味を持っており、この活動によって自然に「当たり前のものはあえて取り上げない」を基準に仲間の作品を評価することができたように感じられた。

(2) 第2時

①授業の概要

導入時の音読では、音読シートの穴埋めをしている表面をスラスラ読めるようになったら裏面の穴あきの方に挑戦するよう声をかけ、練習させた。（ ）には「時間帯」と「景物」が入るようになっており、自然とキーワードに着目させる意図もあった。その後、活用資料集の傍注と写真を使って、全文の大体の意味を確認した。

この時間の目標は、「春」と「夏」を比較して読み、「一般的に好まれないものを評価する」という「清少納言の表現の工夫②」を理解することである。まず、文章全体のテーマを「清少納言が発見した（ ）の（ ）。」という一文で表現させた。ほとんどの生徒が「季節の美しさ」「四季の良いところ」など望んでいた答えを出した。その後、「春」「夏」の中で、季節にふさわしい風物として取り上げられているものに○をつけさせ、場面設定の違いを考えさせ、「春」には「夜明け」の場面一つしか提示されていないが、「夏」には「月夜」「闇夜」「雨夜」の三つの場面が提示されていることを全体で共有した。さらに、夏の三つの場面が対等に表現されているのではないこと（良さに差があること）を示唆し、一般的な共感度の軽重を中学生らしく不等号を使って示させた。「月」「闇」「雨」のカードを使って前で操作させたところ、意見が分かれた。意外にも、「闇」を一番良しとする意見が多かった。理由を聞くと、「闇の場面が一番長く書かれているから」という返答であった。そこで、「さらなり」を口語にした例文を示し、「言うまでもない＝言わなくてもわかる。当然だ」という意味であることに気づかせ、「も」「なほ」「また」という語にはつけ足す意味があることを確認すると、一般的な共感度を「月＞闇＞雨」に並び替えることができた。先に○をつけた景物の中で、「みんながいいと考えるもの（月）」には赤で、「作者が『これもいい』と考えるもの（闇・

雨）」には青で○をつけ直させた。「闇」「雨」に対して生徒がもっているイメージを挙げさせると、「闇→心の闇」「雨→うっとうしい」などが挙がった。「闇」「雨」は、現代と生活は異なるけれど、平安朝の人々も似たようなマイナスイメージをもっていた、と説明を加えた。そこで、「清少納言の表現の工夫②」として「一般的に好まれないものを評価する」として整理した。

最後に、この「表現の工夫②」を使って、次の文章の（ ）に当てはまる例文づくりをした。

夏は真昼。

アイスを食べるはさらなり。

コーラを飲むもなほ、さわやかでをかし。

（どんな状態で何をどうする）もをかし。

②生徒作品例

- ・激辛ラーメンで汗をかく
- ・冷房をつけずに熱いキムチ鍋を食べる
- ・作りたての熱いカレーを食べる

③考察

例文づくりでは、「何をどうする」は浮かんでも、「どんな状態で」というのが例を示しても難しかったようである。出来上がった作品を見ると、当たり前に涼しくなることを書いたものが多かった。最初からねらいとする表現ができていたのは5～6人で、班で交流する際に教師が良い例として取り上げることにより、「そういうことか」と気づいた生徒が多かった。中には、「こたつでおでんを食べる」といった極端な作品もあり、「共感度100%ではなくても、何人かは共感する人がいないと成功ではない」と全体で説明した。夏の真昼の熱いときに「アイス＞コーラ」とは必ずしも言えないので、提示する文の検討の余地はあると考える。

(3) 第3時

①授業の概要

導入の音読練習では、暗唱につなげるために、音読シートを隠して、授業者の暗唱に続けて即座に復唱する練習をした。生徒たちは一所懸命授業者の口元、表情を見て楽しそうに復唱した。

この時間の目標は、「清少納言の表現の工夫②」を使って「秋」「冬」の表現の仕方を読み取り、清少納言のものの見方や考え方を捉えることである。初めに、「夏」を取り上げ前時の学習内容を復習しながら、分析シートへの記入の仕方を説明した。分析シートの内容・構成は以下の通りである。

（分析シート）

「清少納言の表現の工夫②」の「一般的に好まれないものを評価する」という特徴について（ ）の段を使

って説明します。

まず、一般的に好まれる「みんながいいと考えるもの」を探すには（ ）がキーワードになります。（ ）とは（ ）という意味です。清少納言は「一般的に好まれないものを評価する」ので、（ ）の段の（ ）は当然すばらしいものであるとしてさらに軽く表現しています。

それに比べて、「作者が『これもいい』と考えるもの」を探すには、（ ）がキーワードになります。（ ）の段には、（ ）のような、普通感覚では歓迎されないものが「すばらしいもの」として提示されていることがわかります。

このように、清少納言は、あえて読者の予想や期待を裏切るようなものを提示することで、（ ）と考えられます。

「秋」を担当するエキスパート・グループ、「冬」を担当するエキスパート・グループを4つずつ作った。「それぞれのグループで分析したことを、後でジグソー・グループになって説明し合う」と伝えたところ、生徒たちは積極的に分析を始めた。しかし、分析シートの（ ）に入る言葉を考えるのは難しかったようである。学力的に厳しい生徒も、前時までは楽しそうに参加していたが、この活動では「わからん」と言ってやる気をなくしてしまった。机間指導でヒントを出しながら取り組ませたが、最後までたどり着けないグループもあった。

ジグソー・グループになり、「秋」「冬」それぞれの分析を説明し合った後、分析シートの最後（清少納言の表現意図）を再度考えさせた。「季節にはもっといいところがあることを伝えようとした」という解答が多かったが、「受けをねらった」と答えたグループがあり、詳しく説明するように促した。すると、「伝統的な季節の美しさは知っていたけれど、さらに一歩進んだ考えを示そうとした」という予想以上の答えが返ってきた。他クラスでも同じ授業をしたところ、「大衆とは違った感覚を持っていることを表そうとした」、「他の作者とは違うところを見せようとした」など、数は少なかったものの鋭い意見が出された。

②考察

「みんながいいと考えるもの」と「清少納言が『これもいい』と考えるもの」に気づかせるのに、「言うまでもない」という意味をもつ言葉に着目させたのはわかりやすかった。しかし、途中で立ち止まってしまうグループが多く、やはり、最初の段階でもっと丁寧に語句の説明や内容読解をやっておくべきだったのではないかと感じた。また、「秋」では、「言ふべきにあらず」に着目させると、「風の音、虫の音」が「みんながいいと考えるもの」で、「鳥」が「清少納言が『これもいい』と考えるもの」になり、高

い国語力をもつ生徒ほど、「これでいいんですか？」と質問してきた。感覚的に対比させるのは同じ鳥である「雁と鳥」で、「音と鳥」を対比させていることに違和感を感じたのではないかと思った。また、今回の授業をして初めて分かったが、「鳥」に対して生徒たちがあまり悪いイメージをもっていなかったのも、対比に気づきにくかった要因ではないかと思う。「冬」では、「（ ）のような、普通感覚では歓迎されないもの」の（ ）にどうまとめて書けばよいかわからない生徒が多く、答えを教授することとなった。

(4)第4時

①授業の概要

導入では、ペアをつくって一人が暗唱、もう一人が教科書を見ながらサポート、という形で暗唱に挑戦させたが、全文を暗唱できるのは数名であった。

この時間の目標は、清少納言の人物像をとらえ、他の題ならどのような表現するのかを想像して書くことである。初めに、「清少納言の表現の工夫」①②の例を挙げながらペアでそれぞれ説明し合い、全体で確認し、清少納言が当時の一般的な美意識とは異なった表現をしていることを全体で共有した。そして、清少納言の人物像を「素直さ」「教養」「表現力」「観察力」の四観点から成る「性格シート（レーダーチャート）」を用いて評価させた。おそらく「教養」の意味が分からないだろうと予測し、辞書に載っていたとおり「一人の社会人として身につけるべき、幅広い知識や心の豊かさ」と説明したが、半分くらいの生徒が今一つピンと来ていない表情をしていた。机間指導してみると、みんな「表現力・観察力」は高く、「素直さ」を低くつけていたが、「教養」についてはまちまちで、やはり意味がよくわからないのだなと思った。また、世間一般が良いと言っているもの以外を評価する清少納言を、「社会人としての常識がない」と誤って認識して「教養」を低くつけている生徒も見られた。そこで、「一般的に良いものを知ったうえで、あえてそれ以外のものも評価しているんだよね」と再確認を図った。

次に、レーダーチャートを基にして清少納言の人物像を「(A)だが(B)」と一文で表現させたところ、「観察力はあるが素直じゃない」など、レーダーチャートの言葉をそのまま使ったものが多かったが、中には「頭はいいがひねくれている」などユニークな表現もあり、全体で紹介した。清少納言の人物像を共有した後、「うつくしきもの」には「どんなちごの顔」が提示されていると思うか尋ねてみたところ、「怒っている顔」「泣いている顔」などの意見が返ってきた。活用資料集を使って「うりに書きたるちごの顔」という言葉と写真を確認すると、生徒たちは無表情・無反応であった（おもしろいわけがない、理解できな

い、といった心情の表れか。

最後に、清少納言が別の題で文章を書くとしたらどのような表現をするか考える活動を行った。「つめたきもの」「おそろしきもの」「泣けるもの」の中からグループで1つを選び、全員が一文ずつ書いてつなげ、一つの章段にするようにした。時間が十分に取れない中での活動であったが、何とか全部のグループが模造紙に作品を書き、黒板に貼って他班の作った作品を読み合うことができた。清少納言のものの見方、考え方が反映された作品は1グループに1文あるかないかぐらいであったが、授業者が「これおもしろいね。清少納言っぽいね」と評価することによって、ねらいとする表現がどのようなものであるか気づき、ユーモアのある作品を楽しんでいた。

②生徒作品例（よくできているものを列挙）

「おそろしきもの」

いつも優しい人。技術の進化。何が起こるかわからない現実。自分の欲。

「つめたきもの」

つくり笑いをした後の人の顔。失敗をした人を見る目。
私を生んだのに、先にいなくなってしまう母。ギャグ。

③考察

「レーダーチャート」を用いたのは初めてだったが、生徒たちはゲームなどで見慣れているからだろう、強い興味を示し、意欲的に取り組んだ。

この授業は、本校国語科の公開授業も兼ねていて、参観者から『性格シート』に『教養』を入れるのはどうだろう？という疑問も出された。名称は「人物像シート」にすれば問題ない気もするが、観点に「教養」を入れるのであれば、生徒の腑に落ちるような説明が必要であると感じた。

4時間の授業を終えて、平安時代の一般的な美意識と「春はあけぼの」の表現を比較して清少納言が独自性を出そうとしたことをつかみ、清少納言の人物像を捉えるという流れが自然でわかりやすかったと思う。また、たったこれだけの短い文章からこれほど細やかに作者の表現の意図と工夫を分析できるということに感動した。「表現を学ばせる」とはこういうことなのだなと考えさせられ、大学との共同研究の醍醐味だと感じた。

悔やむべきは、もう1時間ゆとりをもって授業をすればよかったということである。特に、生徒たちは小学校で一度学習しているから音読や現代語訳は少し触れれば思い出すだろうと考えていたのが間違いで、もう少し時間を取って丁寧に指導しておけば、後の学習活動がもっとスムーズにいったのではないと思う。暗唱については、それを目標に毎時間取り組んできたので、4時間の授業が終わってからチャレンジの時間を設けた。集中して覚える時間を

設けたことで、8割以上の生徒が全文を暗唱することができた。（今村有紀）

6 研究のまとめと今後の課題

本研究は、小学校・中学校で全教科書に採用され、重複教材となっている『枕草子』初段（「春はあけぼの」）の授業改善と、小・中（高）の発達段階をふまえた、段階的・系統的な指導カリキュラムを提案することを目的としている。ここでは、吉田茂樹・武久康高（高知大学教育学部）と今村有紀（高知大学教育学部附属中学校）が開発・実践した「春はあけぼの」の実践研究を史的に位置づけ、今後の課題を提示したい。

(1)「春はあけぼの」（中学校）の授業の課題

「春はあけぼの」を教材とする授業の課題に言及した論に、藤本宗利（2003）・小森潔（2011）の論考がある。有働裕（2015）は、小森潔・藤本宗利の論に触れながら、中学校の授業に対する疑問について、次のとおりに3点を挙げている。①学習内容の大半が、音読・暗唱、現代語訳からの大意把握、感想発表、現代版「春はあけぼの」作成という小学校の実践と類似している（28頁 注：下線部は渡邊による。以下同じ。）。②清少納言とその生きた時代に関する説明、参考資料などの外部情報を基に、本文の詳細な検討のないままに、「日本人の感性」、「ステレオタイプの作品評価や日本文化論」が注入されている（28頁）。③小森潔の指摘するように、「筆者のものの見方」の理解が「難解な学習目標」であるにもかかわらず、教育現場に、朗読・暗唱中心の学習によって「筆者のものの見方」が理解できるとする考えがあるところに深い問題がある（28頁）。有働裕の③の問題指摘が的確であれば、それゆえに①②の指導が改善されないままに繰り返されることになる。

本研究においては、①音読・朗読・暗唱中心の指導で本文を読んだことになるのかという疑問、②書きかえ（現代版「春はあけぼの」など）中心の指導で「作者のものの見方考え方」を理解することになるのかという疑問、③「古典に表れたものの見方や考え方」「作者の思い」の理解が目標に掲げられながらその内実が明確化されていないことへの疑問を挙げている。上記の疑問は、本研究の指摘する疑問にほぼ重なるものといえる。

本研究の特色は、上に提示された疑問を明確な課題として設定し、その解決のための具体的な授業改善の方策を提示し、授業において検証した点にあるといえる。

(2)「春はあけぼの」の先行授業実践例

①中学校における先行授業実践例

中学校における「春はあけぼの」の実践事例は、以下の

通りである。

1980 年代に入って、池田重信（1983）「古典に親しませる—『枕草子』の授業」が報告されている。指導目標は、①読み慣れ、脚注を利用した大意把握、②朗読をとおした味わいの深化、③作者のものの見方と個性的な感覚の把握と、現代との比較の三点が立てられている。授業展開は、第1時で学習の見通しをたて、音読、大意把握の後、。第2時で、作者の四季のとらえ方、感じ方理解（グループ学習）の指導がなされた。第2時は、次のワークシートを用いて話し合いをさせている。

	(時刻)	(景物)
春	あけぼの	山際・紫だちたる雲
夏	夜	月、（やみ）螢、夕日、山の端
秋	夕暮れ	鳥、雁（視覚） 風の音、虫の音（聴覚）
冬	つとめて	雪、霜、炭火 *灰

○右（上）の点をもとに、自由に存分に話し合わせたい（74・75 頁）。

第3時では、『枕草子』と同一テーマのミニ随筆発表。補充教材の鑑賞。自作のミニ随筆との比較、作者の感じ方を考えると展開している（73・74 頁参照）。池田重信は、ア. 生徒の発達段階、興味・関心に応じた質の高い教材を精選し、イ. ポイントを絞った読みの指導を試み、ウ. 音読・朗読を重視し、暗唱を進め、エ. 古人の心に触れ、読むことの面白さに気づかせる古典の授業を、オ. 視聴覚機器を利用して効果的に進めることで、生徒を古典に親しませようとした点に特色が見いだされる（72・73 頁参照）。

和田征文（1986）の実践は、「春はあけぼの」を扱う方法に優れた点を持っている。「問う力」を育てることを目指し、疑問を「教材の構造に位置付け、意義付けることによって初めて学習課題となる。」（74 頁）という考えに基づき、通読・感想メモ→感想発表・課題設定→学習課題に基づく読解という指導過程を、通読・感想分析→（評価）→全体把握の作業学習→課題設定Ⅰ→（評価）→読解・課題設定Ⅱ→作者（筆者）の想を重視した読解、というように換えて授業を展開している。授業の全体（構造）把握と読解には、ワークシートが用いられている。ワークシートは、自らのとらえている四季を書かせる欄と、第一段本文の構造的読み取りのための欄から成っている。後者は、「いつ（四季の観点）・どんな情景を（その美観）・思い（感覚的裁断）という観点でかき分けながら、それぞれの段落の文章構成の仕方に、生徒各自のペースで気づいていく」（76 頁）ように工夫がされている。このワークシートに記述する作業を経て気づきを、学習課題に組織していくと

されている。これは、池田重信の方法の延長に位置づけられよう。

浮橋康彦（1985）に「古典学習の作業化」として、次のワークシートを開発している。

季節	時	対象・物	情景・ようす・状態
春は	1 あけぼの。	2 山ぎは雲の	3 やうやう白くなりゆく、少しあかりて、紫だちたるほそくたなびきたる。
夏は	5 夜。	6 月のころはやみもほたるの 雨など	7 多く旅ちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光て行くも降るも
め と ま	17 よい時として、真昼のよう に明るく 光線の多いときは入っていない。暗い時やほの明るい時。	18 山。夕日、月、やみ、雲、雨、雪、霜。ほたる、雁、虫。風。火・炭。（自然物中心）	19 やうやう、少し、ほそく、一つ二つ、ほのかに、三つ四つ、二つ三つ、小さく、など、あまり程度の大きくない、こまかなもの、わずかなものの状態が多い。

（123・124 頁 秋・冬段は渡辺が省略）

浮橋康彦の提案は、池田重信・和田征文の実践を発展させ、授業を作業化・視覚化による主体的学習に拓き、上記の表の「まとめ」に見えるとおり、さらに清少納言のものの見方の内実に迫ろうとしたところに特色がある。

水戸敬子（1987）「古典を読み深めるための作文指導『春はあけぼの（枕草子）』（中三）」の実践概要は、次のとおりであった。①指導のねらいについては、「清少納言の世界を現代に生きる生徒が自分の世界に映しかえて味わうことによって、より主体的に理解を深め、古典を身近なものとしてとらえさせる」（98 頁）と記されている。②目標は、「○音読し、古文のリズム、表現上の特色をとらえる。／○筆者のとらえた四季それぞれの趣を読み取り、豊かな感受性、ものの見方を理解する。／○鑑賞文をまとめ、主体的な理解を深め、古典を身近なものとしてとらえる。」（99 頁）とされている。③指導計画は次のとおりである。

- (1) 音読し、文章のリズム把握。四季の趣のとらえ方、文章の構想についての読み深める。
- (2) 四季の中の一つを視写し、注を参考に情景を描き出し、自分の感想をまとめる。（一次感想）

(3)鑑賞文をもとに話し合い、筆者の感受性、ものの見方を主体的にとらえる。(本時)

(4)「うつくしきもの」を読解し、筆者の感じ方について話し合う。「春はあけぼの」を学んでの感想をまとめる。(二次感想) (99 頁)

授業のねらいについて、水戸敬子氏は、「平安時代に清少納言が感じ、表現したことについて、現代の中学生自身が自分たちの経験におきかえて見、どのようなものとしてとらえたかを大切に、発表しあい話し合うことによって、より感受性を深めていく授業をねらった。」(103 頁)と説明している。授業後に一人の生徒は、次のような二次鑑賞文を書いている。

(前略 渡辺) 古文だから、素晴らしいのではなく、ちょっとしたことに目をかたむけ、耳をかたむけ、そして心をかたむけ、それを文章に自分の思うままに、書き綴ったから、素晴らしいと思うのです。清少納言は、自然や季節に味わいがあることを教えてくれました。現代に通ずる清少納言の心をつかむことができました。(104 頁)

1990 年代には、桑田泰佑・勝山謙一(1991)による「枕草子(春はあけぼの)」が、両教諭の実践を踏まえた提言的論考を発表している。平成元年度改訂学習指導要領に基づく古典指導の方法を『枕草子』(春はあけぼの)を例に提示している。目標は、「ものの見方や考え方、感じ方を理解し、自然の描写などに注意して読み味わい、自分の感想をまとめる。」(69 頁)とされている。学習指導の経過は、次のとおりである。

〔第一次〕(一時間)

①「春はあけぼの」の原文をすらすら音読ができるようにする。(範読、つれ読み、斉読、群読、個人読み)

②作者・清少納言、作品『枕草子』について必要な知識をまとめる。

〔第二次〕(四時間)

③文章に描かれている情景をそれぞれの場面に分けて画用紙に書いて音読する。(第一時)

④省略された述語や助詞等を補い、脚注を利用して口語訳を書く。(第二時)

⑤ワークシートで文章の構成を理解してから「教材プリント」を試作して、その効果を話し合う。

(第三時)

⑥描いた絵を VTR に撮り、LL 教室を利用して声(音読)をつけ、評価・鑑賞する。(第四時)

〔第三次〕(一時間)

⑦「春はあけぼの」のよさを外国人に紹介する文章を書いて、発表し合う。

(75 頁 注:便宜上渡辺が番号を付した。)

多様な音読、視覚化(絵画化)による読み取り、VTR の利用による音声表現、ワークシートによる内容把握と生徒による「教材プリント作り」、外国人への紹介文など随所に工夫の見られる学習指導である。

岩崎淳(1993)「比較読みによる古典学習—『枕草子』と徒然草」では、「春はあけぼの」と「をりふしの移り変はるこそ」(『徒然草』19 段の春の部分)の比較読みを 5 時間をかけて行っている。『枕草子』と清少納言について学習し、「春はあけぼの」を読む。『徒然草』と兼好法師について学習し、「をりふしの移り変はるこそ」の春の部分を読むというように展開し、両者を比較し、最後に文章を書かせている。生徒の一人は、「枕草子では、ほんの短い時間の風景を短い文章でみごとに表している。まるで短歌や俳句のような感動の表し方だ。徒然草は瞬間ではなく、季節の移り変わりという長い時間の中での感動を枕草子よりも長い文章で表している。短い文章では文章の緊張がより強調されるが、徒然草のような文章では短くもなく適当な長さで、緊張もとけてやわらかいゆるやかな感じを受ける。(後略)」(35 頁)と書きまとめている。

増田知子・吉田裕久・山元隆春他 8 名(2013)「新学習指導要領の下での授業実践—伝統的な言語文化の学習における小・中・高の連関について(2)一」に、中学校の実践が報告されている。本研究の趣旨は、「(I)小学校における「春はあけぼの」(『枕草子』)の先行授業実践例」で述べた。

研究仮説は、「昔の人と今の人のものの見方・感じ方・考え方を比較し、自ら考えることによって、古典の価値や古典を読む意義を感得することができるだろう。」(111 頁)である。

教材研究については、次の通りに述べられている。

この段には、筆者清少納言の四季に対する独自の見方や感じ方が表されている。当時は『古今和歌集』に表現されている季節感が時代の規範となっていた。筆者は、「月」「虫の音」「雪」などの題材に見られる既成の美意識を踏まえながら、新たに発見した美として春のあけぼのの変化する空の様子、夏の夜の闇・蛍・雨、秋の夕暮れのからす、雪や霜のない冬の朝の寒さなどを挙げている。伝統や規範を超えた、新たな美を提示しているのである。(111 頁)

学習目標は、「①繰り返し音読することを通して古典の

リズムを味わう。／②簡潔な文章や表現の工夫などの描き方とその効果をとらえる。／清少納言の四季に対するものの見方を、現代のそれと比べてとらえる。／④『古今和歌集』との比較から、清少納言独自の美意識をとらえる。／⑤四季について考え、意見を持つ。」（111・112 頁）である。

授業は、次の通りに展開した。「第1時 『枕草子』の概要を知る。自分たちの四季感を出し合う。／第2時 全体の構成をとらえるとともに、『春』『夏』の部を読む。／第3時 『秋』『冬』の部を読む。／第4時 清少納言の四季感の独自性をとらえるとともに、自分たちの四季感との共通性と相違点を明らかにする。／第5時 「自分たちと四季」と言う題で意見を書く。／第6時 自分たちが書いた意見を読み合い、感想や意見を交流する。」（112 頁）

次に第4時の生徒と清少納言の四季感の共通点と相違点、ならびに第5時に書いた意見を挙げる。

〔清少納言と自分たちの四季感の共通点と相違点〕

共通点

- ・清少納言が一般常識として書いているものは自分たちも四季感としてとらえている。（雪・虫の音・螢）
- ・『古今和歌集』の時代にはなかった四季感、新しい四季感をもっている。

相違点

- ・昔は自分が体験したことに季節感を感じているが今は言葉からのイメージやメディアからの情報によって四季を感じている。
- ・昔の人は感覚が鋭く、また、動きなど細かいところまで見ているが、今は五感から遠ざかり、目の端に映った自然しか見ていない。

生徒の意見

- ・過去と現在、1000 年経っても根本的なところは“日本人”のままである。
- ・いつの時代にも特有の四季感があると思うので、現代の四季感を否定しないで大事にすればよい。

（112 頁）

広島大学附属中学校の実践は、方法としての比較が有効に機能している。山元隆春は、「より具体的で、かつ見方や感じ方の内実にもまで踏み込むようなかたちでの比較を行っているところに中学生の比較の仕方の大きな特徴がある。」（114 頁）と評価している。この実践では、学習者←→清少納言の四季感←→外部情報『古今和歌集』の四季感との比較、さらに、学習者間の比較が行われている。それらの比較によって、清少納言の四季感の伝統と創造の

内実にも迫るとともに、学習者の四季感の伝統と創造にも目を向けさせている。高校における授業についても、「『徒然草』「をりふしの移り変はるこそ」（第19段）や『新古今和歌集』や近世の俳諧などと比較し、自然や四季についてさらに深く考える授業の実践」（114 頁）が提案されている。

②実践事例考察のまとめと本授業実践の位置

（ア）実践事例考察のまとめ

先行の実践事例に関する考察を、以下にまとめる。

- 〔目標〕清少納言のものの見方・感じ方・考え方の特色理解が志向されている。
- 〔理解の方法 A〕ワークシートを用いた視覚化、作業化、絵画化（イメージ化）による指導によって、清少納言のものの見方・感じ方・考え方の特色理解がなされている。
- 〔理解の方法 B〕他作品（外部情報）との比較、学習者の創作・意見表現ものの見方・感じ方・考え方との比較、学習者間の比較によって清少納言の四季感（ものの見方・感じ方・考え方）、および学習者の四季感の理解が深められている。実践によっては、『古今和歌集』との比較によって、「春はあけぼの」に四季感の伝統と創造が見いだされている。
- 〔理解の方法 C〕理解と表現の関連指導を通して、理解を深めている
- 〔主体的学習の方法〕グループ学習による学び合いが組み込まれ、主体的な学習が行われている。また、視覚化、比較という方法が、対話を促し、興味・関心を喚起し、主体的に学習することに繋がっている。

（イ）本授業実践の位置

高知大学教育学部附属小学校の「春はあけぼの」の授業は、直接には、有働裕に代表される読みへの疑問を踏まえ、広島大学附属小・中学校における「小学校・中学校・高等学校の連関・系統」に向けた問題意識と、先行の他作品との比較による理解を深める実践の延長に位置づけられる。具体的には、『古今和歌集』の四季の景物表現と「春はあけぼの」の表現との比較を通して清少納言の表現の工夫に気づかせる。また、本文のキーワードに着目することによって、「春はあけぼの」の表現構造が、(1)みんながよいと考えるもの（伝統的な美意識）と「(2)作者が『これでもいい』と思うもの」（清少納言の美意識）から成っていることに気づかせるとともに、独自の美意識を打ち出した点に着目させる。このような学習をとおして春はあけぼの」にみえる清少納言の四季感の伝統と創造を理解させる試みであるといえる。

（3）高知大学教育学部附属中学校の実践の考察

高知大学教育学部と同附属中学校が開発・実践した「春

はあけぼの」（光村図書「国語 2」）の授業研究を対象として考察し、成果と課題をまとめるものである。

①「春はあけぼの」の授業の課題と解決策

本研究においては、「春はあけぼの」の学習指導の課題は、「3」の(1)(2)（吉田茂樹）において述べられている。課題は、ア．音読や暗唱に終始し、読みに機能しない指導、イ．「昔の人のものの見方や感じ方」を知ることに関がらない、書き換え（創作）を中心とした指導、ウ．内実が明確化されないままになされている「春はあけぼの」の「昔の人のものの見方や感じ方」の指導という3点であった。その課題解決の方策については、「3」の「(3)」（吉田茂樹）で、すでに述べたとおりである。すなわち、

ア．音読や暗唱を内容や表現形式を理解するための方法として積極的に活用する。

イ．『古今和歌集』の四季における典型的景物と「春はあけぼの」を比較し、「清少納言の表現の工夫①」

（当たり前のもととはあえて取り上げない）ことを発見させる。また、武久康高による本文の「さらなり」「言ふべきにあらず」「言うべきにあらず」などのキーワードによって、「(1)みんながいいと考えるもの」

（伝統的な美意識）と「(2)作者が『これもいい』と思うもの」（清少納言の美意識）が識別され、清少納言独自の美意識が強調されていることを「清少納言の表現の工夫②」（一般的に好まれないものを評価する）に気づかせることで、「昔の人のものの見方や感じ方」の内実を把握させる。

ウ．書くために必要な表現の工夫や効果を「春はあけぼの」（『枕草子』）から読み取り、書き手である清少納言のものの見方や感じ方の観点を理解し、清少納言に擬似的になったつもりで、「つめたきもの」「おそろしきもの」「泣けるもの」をグループで一題選択し、グループで一文ずつ書いてつなぎ合わせてグループ作品を製作する。

とする方策である。

②附属中学校における「春はあけぼの」授業の成果

（ア）音読・暗唱による内容理解

キーワードを抜いた「音読シート」を利用して、音読・暗唱が全時間なされている。キーワードを空欄に書き入れ、音読・暗唱することによってキーワードに自然に着目させ、「春はあけぼの」の表現構造の理解に繋げることができたと考えられる。

（イ）「昔の人のものの見方や感じ方」の内実把握

『古今和歌集』の伝統的景物と「春はあけぼの」の比較、「(1)みんながいいと考えるもの」（伝統的な美意識）と「(2)作者が『これもいい』と思うもの」（清少納言の美意識）に基づく表現構造の理解によって、「春はあけぼの」

における「清少納言の表現の工夫①②」のおおよそが理解できたと考える。これによって、清少納言のものの見方や考え方の特徴を、『古今和歌集』の規範的な自然観や美意識を踏まえながら、自らが感じ、発見した美を織り込んだ独自の表現を提示したものであることに気づいたと推察される。これは従来の授業には見られなかった新たな試みであるといえよう。また、この授業には、「春はあけぼの」を対象とする文学研究の成果が取り入れられている点も注目される。

③附属中学校における「春はあけぼの」授業の課題

（ア）「昔の人のものの見方や感じ方」の内実把握

(a) 清少納言の表現の工夫①

藤本宗利（1984・1997・2003）において繰り返し述べられているのは、「『季節—風物—時刻』という、当時通念化していた連想の環」（1997）である。すなわち、春—花一曙、夏—時鳥—夜、秋—紅葉—夕暮、冬—雪—早朝という連環である。連環があるゆえに、「春はあけぼの」と風物の花が書かれなくとも、花は想起される。しかし、想起されるはするが、表現上では実像を結ばぬために読み手に攪乱を与えるという、新たな表現への挑発的な仕掛けがあるとされる。そのような連環のない現在、清少納言の表現の工夫①の理解は生徒には難しかったと思われる。表現の工夫①に基づいた生徒の表現活動も「苦戦していた」とある。また、「当たり前のこととはあえて取り上げない」表現の工夫①を強調すると、「(1)みんながいいと考えるもの」（伝統的な美意識）を書いていることとの間に矛盾が生じないであろうか。

(b) 清少納言の表現の工夫②

表現の工夫②は、「(1)みんながいいと考えるもの」（伝統的な美意識）と「(2)作者が『これもいい』と思うもの」（清少納言の美意識）に基づき、「(2)」を強調するものである。それを、「一般的に好まれないものを評価する」として指導がなされている。しかし、この表現は適切であろうか。平安朝にあつて「蛩」などは一般的に好まれないとはいいがたいであろう。また、表現の工夫②を用いた生徒の表現活動は、「最初からねらいとする表現ができていたのは5〜6人」であったという。「一般的に好まれない」ということから、極端な作品もあり、「何人かは共感する人がいないと成功ではない」と指導する一幕もあったとされている。さらに、清少納言像の追求過程で、「世間一般が良いと行っているもの以外を評価する清少納言を『社会人として常識がない』と認識するものも出たとある。表現の工夫②を「みんなが認めるほどではないが、見方によっていいと思われるもの」としてはどうであろうか。

（イ）内実理解のための学習者の表現活動

表現の工夫①、表現の工夫②を用いた表現活動に関しては、上で一部述べた。表現の工夫①②に基づく生徒の表現

活動によって、「春はあけぼの」の構造や観点には気づいたものと推察する。しかし、「春はあけぼの」の内実（表現されたもの・ことの特色や性質）に迫り得たかはなお検証が必要であろう。

（ウ）「春はあけぼの」の内実理解のための方策

（a）キーワードに着目させ、「(1)みんながいいと考えるもの」（伝統的な美意識）と「(2)作者が『これもいい』と思うもの」（清少納言の美意識）から内実に迫る方法は、有効であろう。

（b）「春はあけぼの」の本文の構造を視覚化する方法、絵画化する方法も有効である。実践事例における池田重信、浮橋康彦のワークシートは、縦横に見ることでものの見方・考え方・感じ方の内実に迫りうるものとする。

（c）比較と対話による追求

広島大学附属中学校の実践では、学習者 \longleftrightarrow 清少納言の四季感 \longleftrightarrow 外部情報『古今和歌集』の四季感との比較、さらに、学習者間の比較が行われている。それらの比較によって、清少納言の四季感の伝統と創造の内実に迫るとともに、学習者の四季感の伝統と創造にも目を向けさせている。比較は対話を産み、対話が理解をふかめる。この構造を生かしたい。

（渡邊春美）

第2学年 国語科学習指導案

- 1 対象 第2学年C組 34名（男子17人 女子17人）
- 2 日時 ①平成29年5月 8日（月）第1校時（8：55～9：45）
 ② 5月10日（水）第3校時（10：55～11：45）
 ③ 5月12日（金）第2校時（9：55～10：45）
 ④ 5月13日（土）第2校時（9：55～10：45）

3 場所 2年C組教室

- 4 単元名 清少納言の人物像を想像しよう
 主教材「枕草子」（光村図書「国語2」）

5 単元設定の理由

(1) 生徒観

本学級の生徒は、古典教材の学習としては、1年時に「竹取物語」で古文の読みと、平安時代の人々のものの見方や考え方にふれる学習を行っている。「月に思う」という教材で、古人の「月」への美意識についても少しふれている。

「春はあけぼの」は小学校で既習の教材であるが、本校の生徒は様々な小学校から入学しているので学習内容に差があることが予想される。導入として小学校で学習したことを問いながら確認するとともに、中学校ではより難度の高い学習をすることを伝え、今回の学習への興味・意欲を高めたい。

文学的文章の学習という視点で言うと、1年の教科書にも「空を見上げて」という随筆が採録されている。しかし、これは東日本大震災で被災した中学生たちが句を紡ぐことによって心を解放し、全国の人たちとつながっていったことから、言葉のもつ力を述べた内容で、作者特有のものの見方、考え方を捉える題材ではなく、そういう学習も行わなかった。本単元につながる学習としては、「自分とは異なる人物の視点で文章を書く」ということを生徒たちは2度体験している。1度目は、1年時に「少年の日の思い出」で、物語の視点人物とは異なる登場人物の視点から物語を書き換える活動を行っている。2度目は、つい先日、「アイヌプラネット」の最終時に、主人公の気持ちを想像して手紙を書く活動を行った。本単元では、清少納言の表現の仕方に倣って文章を書いたり、清少納言のものの見方や考え方を想像したりする言語活動を取り入れているので、こうしたこれまでの活動が生かされると考える。

グループワークは1年時より日常的に行い、生徒たちは慣れているが、2年進級時に学級編成があったため、新しいメンバーとの交流にはまだ硬さが見られる。ジグソー・グループによる活動は初めてなので、方法と内容の説明をわかりやすく伝える工夫が必要である。

(2) 教材観

本単元の主教材である「春はあけぼの」は、小学校の全ての教科書に採録されているため、生徒全員が二回目の学習として取り組むことになる。既習の教材として、小学校とは別な側面からの教材解釈が必要となる。小学校では「春はあけぼの」と自分のものの見方や感じ方を比較することを通して、清少納言のものの見方や感じ方を読み取ることが中心となる。小学校の学習を受けて、中学校では、「春はあけぼの」における美意識と当時の規範となっていた『古今和歌集』の通念的な美意識とを比較することを通して、清少納言のものの見方や考え方の特徴を読み取ることが中心とする。

本実践では、「春はあけぼの」には作者である清少納言の美意識が率直に表現されていると考える立場はとらない。その上で、清少納言のものの見方や考え方の特徴を、平安朝一般及び日本人の自然観や美意識を踏まえながら、自らが感じ、発見した美を織り込んだ独自の表現を提示しているととらえる。本実践では、「春はあけぼの」における表現の仕方を「通念的な概念に対する沈黙」と「非通念的なものへの言及」の二点に整理している。

「通念的な概念に対する沈黙」とは、当然書かれるべきものが書かれないことで、かえって読み手にその存在を強く印象づける表現の仕方である。当時の自然観や美意識の規範であった『古今和歌集』によって、「月」「風の音、虫の音」「雪」などを評価する通念的な既成概念が形成されていた。清少納言は、これらの伝統的な美意識に支えられた景

物を「さらなり」「言ふべきにあらず」「言ふべきにもあらず」と「みんながいいと考えるもの」として提示している。しかし、「春はあけぼの」には「春—花（桜）」「夏—時鳥」「秋—紅葉」「冬—雪」という、季節と景物を語る上で最も典型的な取り合わせが、「冬—雪」を除いて使用されていない。ここから「当たり前のものはあえて取り上げない」という「表現の工夫①」を読み取ることができる。

「非通念的なものへの言及」とは、当然書かれるべきでないものが書かれることで、かえって読み手にその存在を強く印象づける表現の仕方である。「春はあけぼの」には、『古今和歌集』の規範的な美意識から外れた、「夏の闇夜や雨夜」「秋の夕方に飛び急いでいる鳥」「雪も降らない寒い冬の朝」といった一般的には評価されない景物が提示されている。これらの清少納言が発見した伝統や規範を超えた新たな美を「も」「なほ」「また」「さへ」と「作者が『これもいい』と思うもの」として提示している。ここから、「一般的に好まれないものを評価する」という「表現の工夫②」を読み取ることができる。

以上のような教材の特徴から、本単元では、『古今和歌集』との比較を通し、清少納言のものの見方や考え方の観点をとらえていく。読み取った「清少納言の表現の工夫①②」の特徴を、自分の知識や体験と関連させることで意味づけることにより、「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」ができるようになると思われる。

(3) 指導観

本単元は、学習指導要領「C読むこと」の言語活動例「ア 詩歌や物語などを読み、内容や表現の仕方について感想を交流すること。」を通して、指導事項「エ 文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連づけて自分の考えをもつこと。」及び、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の指導事項「ア(イ) 古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。」を中心に指導するものである。さらに、「春はあけぼの」の表現の仕方から読み取った清少納言のものの見方や考え方をを使って、清少納言の人物像を書く過程で、「B書くこと」の指導事項「ウ事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりすること。」を合わせて指導する。

本単元では、「春はあけぼの」における表現の仕方を読み取ることで、作者である「清少納言の人物像を想像する」という「単元を通して課題解決をめざす言語活動」を単元のゴールとして設定している。まず、清少納言の人物像を想像するために必要な「春はあけぼの」における表現の仕方を読み取る。その表現の仕方を使い、疑似的に清少納言になって様々に書き換える活動を通して、作者のものの見方や考え方の観点を実感的に理解していくように設定する。具体的な指導は以下の通りである。

まず、単元を通して音読・暗唱に繰り返し取り組み、単元終了時には全員がリズムよく暗唱できるようにすることを前提としている。第1時では、まず、各段落（春夏秋冬）の構成が「良さを最も感じる時間帯（結論）—景物の様子（説明）」となっていることを理解させる。さらに、各段落（春夏秋冬）の一文目が、「春—桜」のような『古今和歌集』の通念的な美意識による決まりきった「季節+代表的な景物」の取り合わせではなく、「春—あけぼの」といった「季節—時間帯」という意外性のあるテーマの取り合わせで表現されていることに気づかせる。この表現の特徴を、「清少納言の表現の工夫①」として「当たり前のものはあえて取り上げない」と整理する。第2時では、「夏」を取り上げる。「夏」にふさわしいとして取り上げられている風物を、「さらなり」「も」「なほ」「また」をキーワードとして、「みんながいいと考えるもの」と「作者が『これもいい』と考えるもの」に識別する。これによって、「春はあけぼの」には『古今和歌集』に表現されている「伝統的な美意識」を踏まえ、新たに発見して表現した「清少納言の美意識」が提示されていることに気づかせる。その上で、あえて「闇」「雨」をもよしとする「清少納言の美意識」を「清少納言の表現の工夫②」として「一般的に好まれないものを評価する」と整理する。第3時では、「秋」「冬」を取り上げ、前時に学習した「清少納言の表現の工夫②」がどのように使用されているのかを、グループワークにより分析的に読み取らせる。第4時では、「清少納言の表現の工夫①②」という表現の仕方から、「清少納言の人物像」を想像させる。評価項目を「素直さ・教養・表現力・観察力」と設定して考察する活動を通して、作者である清少納言のものの見方や考え方の観点を理解させる。

6 単元目標

「春はあけぼの」で使われている表現の仕方から清少納言の人物像を自分なりに想像する活動を通して、作者である清少納言のものの見方や考え方の観点を理解する。

7 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	言語についての知識・理解・技能
作者である清少納言の人物像を自分なりに想像する活動に興味を持ち、意欲的に表現しようとしている。	「春はあけぼの」に表れている清少納言のものの見方や考え方と自分の知識や感覚とを比較することで、自分のものの見方や考え方を深めている。 【C(1)エ】	「春はあけぼの」の表現の仕方から読み取ったものの見方や考え方を使って、清少納言の人物像を根拠を明確に書いている。 【B(1)ウ】	「春はあけぼの」の表現の仕方から清少納言のものの見方や考え方を想像している。 【伝国ア(イ)】

8 単元計画（全4時間）

時	主な学習活動	指導上の留意点	評価及び評価方法
1	<p>☆学習課題 各季節の「一文目」の特徴を読み取ろう。</p> <p>○現代における定番の「(季節) は (代表的な景物)」を考え、季節ごとに一つずつ設定する。</p> <p>○平安人における定番の「(季節) は (代表的な景物)」は何だったのかを、活用資料集を参照しながら考える。</p> <p>○「春はあけぼの」における「(季節) + (時間帯)」というテーマの提示の仕方が新しいものだったことに気づく。</p> <p>○現代における「(季節) + 良さを最も感じる ()」を表現するのにふさわしい新しいテーマを選択し、四季の具体的な項目を考える。</p>	<p>・自由な発想で発言させた後、共感度の一番高い景物を設定する。</p> <p>・「古今和歌集」の美意識による決まりきった季節の景物があることを理解する。</p> <p>・「清少納言の表現の工夫①」として「当たり前なもののはあえて取り上げない」とする。</p> <p>・自分の知識や体験と関連づけて、「当たり前ではない」ものを考えさせる。</p>	<p>●「春はあけぼの」の表現の形式に合わせて、季節の美に関する自分のものの見方や考え方を書いている。 【読む】(ワークシート)</p>
2	<p>☆学習課題 「春」と「夏」とを比較して、表現の仕方の違いを読み取ろう。</p> <p>○「春」と「夏」とを比較して、表現の仕方を読み取る。</p> <p>・「夏」における「月」「闇」「雨」は対等に表現されているのではないことを、不等号を使って表現する。 【例】 月>闇>雨</p> <p>・「みんながいいと考えるもの」のには赤で○、「作者が『これもいい』と考えるもの」には青で○をつけ直す。</p> <p>・「夏」の風景で、作者の感覚が表現されているもの（闇、雨）の特徴を考える。</p>	<p>・「夏」には「月夜」「闇夜」「雨夜」の三つの場面が提示されていることに気づかせる。</p> <p>・「さらなり」をキーワードとして提示し、口語で例文を示す。</p> <p>・「も」「なほ」「また」に着目させる。</p> <p>・「清少納言の表現の工夫②」として「一般的に好ま</p>	

	<p>○「清少納言の表現の工夫②」を使って、例文を作成し、グループで発表し合う。</p> <p>【例】</p> <p>夏は真昼。 アイスを食べるはさらなり。 コーラを飲むもなほ、爽やかでをかし。 (どんな状態で何をどうする)もをかし。</p>	<p>れないものを評価する」とする。</p>	<p>●「夏」における表現の仕方を使い、清少納言のものの見方や考え方を想像して書いている。【伝国】(ワークシート)</p>
3	<p>☆学習課題 「清少納言の表現の工夫②」を使って、「秋」「冬」の表現の仕方を読み取ろう。</p> <p>○「清少納言の表現の工夫②」の「一般的に好まれないものを評価する」について「夏」を使って分析シートに記入しながら復習する。</p> <p>○4人組のエキスパート・グループを8つ作る。4グループずつが「秋」と「冬」の分析を担当する。</p> <p>○「秋」2人「冬」2人のジグソー・グループを作り、お互いに分析結果を説明し合う。</p> <p>○モデル文の最後(清少納言の表現意図)をジグソー・グループごとに一つずつ板書する。</p> <p>○「清少納言の表現の工夫②」を使って、「雲は(第237段)の内容と理由を想像する。</p> <p>【例】</p> <p>雲は、(①色)。(②色)。(③色)もをかし。風吹くをりの(④ノーヒント)。</p>	<p>・「さらなり」「もなほ」「も」に着目させる。</p> <p>・清少納言の表現意図は各グループで想像させる。</p> <p>・プリントの()に入る適語を考えさせる。</p> <p>・お互いに自分の担当の季節の分析結果を説明させる。</p> <p>・「独自の感覚をアピールしようとした」という観点でまとめる。</p> <p>・エキスパート・グループで考えて発表させる。</p> <p>・「春はあけぼの」の「春」を参照するようヒントを与える。</p>	<p>●「春はあけぼの」における表現の仕方から導かれた清少納言のものの見方や考え方を説明している。【伝国】(ワークシート)</p>
4	<p>☆学習課題 「清少納言の人物像」を想像して説明しよう。</p> <p>○「清少納言の表現の工夫①(当たり前なものはいえて取り上げない)」と「清少納言の表現の工夫②(一般的に好まれないものを評価する)」を復習して確認する。</p> <p>○各自で「性格シート(レーダーチャート)」の項目を評価し、理由を記入する。</p> <p>○グループで「性格シート(レーダーチャート)」と理由を説明し合う。</p> <p>○清少納言の人物像を「(A)だが(B)」と一文で表現する。</p> <p>○異なった表現をしている人物像を板書し、共通点を整理する。</p>	<p>・ペアで①②を一つずつ説明し合う。</p> <p>・評価項目は、素直さ・教養・表現力・観察力の四観点とする。</p> <p>・意見交換しながら自分のシートを赤ペンで修正する。</p> <p>・ワークシートに記入させる。</p>	<p>●清少納言の人物像を根拠を明確に書いている。【書く】(ワークシート)</p>

	○清少納言が「つめたきもの」「おそろしきもの」「泣けるもの」という題で書くとしたらどのように表現するかを一文で考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで一題選択し一人一文を考える。 ・全員分の文章をつなげてグループの作品とする。 	●自分なりに想像した清少納言の人物像で意欲的に表現しようとしている。【関・意・態】（ワークシート）
--	---	---	---

9 本時の展開 (4 時間分)

第1時の目標

各季節の一文目の特徴を読み取る活動を通して、「当たり前ものはあえて取り上げない」という「清少納言の表現の工夫①」を理解する。

第1時の展開

	学習活動	指導上の留意点 (○) 評価及び評価方法 (●)
導入 1 5 分	<p>1. 「春はあけぼの」について小学校で学習したことを想起し、単元の学習の見通しを持つ。</p> <p>2. 「穴あき音読シート裏」の () に入る語句を考えて記入する。 ※空欄の内容 ①時間帯 (時刻) ②景物 裏を音読する。</p> <p>3. () が埋められていない「穴あき音読シート裏」を音読する。</p>	<p>○小学校とは違った学習をすることを伝え、意欲を持たせる。</p> <p>○教科書 p.32 で確認させる。</p> <p>○全体で斉読した後、ペアで確認し合う。</p>
展開 3 3 分	<p>4. 文章全体の構成を整理し、本時のめあてを確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">学習課題 各季節の「一文目」の特徴を読み取ろう。</div> <p>5. 現代における定番の「(季節) は (代表的な景物)」を考え、季節ごとに一つずつ設定する。</p> <p>6. 平安人における定番の「(季節) は (代表的な景物)」は何だったのかを、活用資料集 (p. 100～102) を参照しながら考える。</p> <p>7. 「春はあけぼの」における「(季節) — (時間帯)」というテーマの提示の仕方が新しいものだったことに気づく。</p> <p>8. 現代における「(季節) — 良さを最も感じる ()」を表現するのにふさわしい新しいテーマを選択し、四季の一文目と、具体的な景物の様子を考える。 (1)光 (2)音 (3)色 (4)香り (5) 擬声語・擬態語 (6)その他 (自由に設定) 【例】(テーマ: 花の色) 春—黄 (野に咲く菜の花やタンポポ)</p>	<p>○拡大コピー掲示</p> <p>○春夏秋冬それぞれの季節について①良さを最も感じる時間帯 (結論) + ②景物の様子 (説明) となっている構成を理解させる。</p> <p>○自由な発想で発言させた後、共感度の一番高い景物を設定する。</p> <p>○「古今和歌集」の美意識による決まりきった季節の景物があることを理解する。 春—花 (桜) 夏—時鳥 秋—紅葉 冬—雪 ※時鳥については補足説明をする。</p> <p>○拡大コピーの1文目に赤線を引く。</p> <p>○「清少納言の表現の工夫①」として「当たり前ものはあえて取り上げない」とする。</p> <p>○“現代版「春はあけぼの」を作ろう”と称して取り組ませる。</p> <p>○自分の知識や体験と関連づけて、「当たり前ではない」ものを考えさせる。</p> <p>○(6)のモデルとして提示する。</p> <p>○「春—ピンク」(桜)「夏—黄」(ひまわり) となっていないことを確認させる。</p>

	<p>夏—紫（軒先の植木鉢に咲く朝顔） 秋—ピンク（秋空の下に広がる一面のコスモス畑） 冬—赤（冬枯れした風景の中に咲く椿）</p> <p>9. グループ内で「具体的な景物の様子」をクイズ形式で発表し合う。</p>	<p>○写真を提示する。 ○【例】を使ってやり方を説明する。 ○新鮮な組み合わせ（「当たり前ではないが納得！」）を評価させる。</p> <p>●「春はあけぼの」の表現の形式に合わせて、季節の美に関する自分のものの見方や考え方を書いている。【読む能力】（ワークシート）</p> <p>【生徒の作品例】（テーマ：鳥の色） 春は茶。（庭の柵にとまるヒバリ） 夏は青。（きらきら光る川を飛ぶカワセミ） 秋は黒。（木に穴を空けているキツツキ） 冬は白。（湖にくちばしをつけるツル）</p> <p>（テーマ：部活動） 春は出会い。（新しいメンバーで新たなスタート） 夏は団結。（夏のコンクールに向けて励まし合う） 秋は別れ。（引退する先輩と最後のステージ） 冬は戦い。（新入部員を集めるために作戦を立てる）</p>
まとめ 2分	<p>10. 「清少納言の表現の工夫①」を確認する。</p> <p>11. 次時の予告</p>	<p>○2色ペンを持ってくるように伝える。</p>

第2時の目標

「春」と「夏」を比較して読み、「一般的に好まれないものを評価する」という「清少納言の表現の工夫②」を理解する。

第2時の展開

	学習活動	指導上の留意点 (○) 評価及び評価方法 (●)
導入 1 5 分	1. 「穴あき音読シート裏」を音読する。 (3分間に何度でも) 2. 活用資料集を参照しながら、意味の大体を理解する。	○音読を通して、自然に「時間帯」と「景物」に着目させる ○活用資料集 p.40・41 の傍注と写真を活用する。
展開 3 4 分	3. 文章全体のテーマを「清少納言が発見した()の()」の文型により一文で表現する。 [例]清少納言が発見した四季の美しい風景 4. 本時のめあてを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">学習課題 「春」と「夏」とを比較して、表現の仕方の違いを読み取ろう。</div> 5. 「春」と「夏」とを比較して、表現の仕方を読み取る。 ①「春」「夏」で季節にふさわしい風物として挙げられている景物に○をつける。 ・春…山ぎは、雲 ・夏…月、闇一螢、雨 ②「春」と「夏」を比較して、場面設定の違いをペアで話し合う。 ③「夏」における「月」「闇」「雨」は対等に表現されているのではないことを、不等号を使って表現する。 [例] 月>闇>雨 ④「みんながいいと考えるもの」には赤で、「作者が『これもいい』と考えるもの」には青で○をつけ直す。 ⑤「夏」の風景で、作者の感覚が表現されているもの(闇、雨)の特徴を考える。 6. 「清少納言の表現の工夫②」を使って、例文を作成し、グループで発表し合う。	○指名発表→板書する ○冬に一例だけ「わろし」があることは追加して確認する。 ○教科書の原文に黒(エンピツ)で○をつけさせる。 ○「春」には「夜明け」の場面一つが提示されているだけであることを気づかせる。 ○「夏」には「月夜」「闇夜」「雨夜」の三つの場面が提示されていることに気づかせる ○一人に前で操作させ、理由を説明させる。 ○「さらなり」をキーワードとして提示し、口語で例文を示す。「彼が怒ったのは言うまでもない(当然だ)。」 ○「も」「なほ」「また」に着目させる。 ○文章全体のテーマは「清少納言が発見した四季の美しい風景」の上に「伝統的な美意識と」がつくことを板書で確認する。 ○生徒のイメージを聞き、古典におけるとらえ方を説明する。 ○「清少納言の表現の工夫②」として「一般的に好まれないものを評価する」とする。 ○グループからウィットの効いた表現(「うまい」「清少納言の表現に近い」)を選出し、交流する。

	<p>[例]</p> <p>夏は真昼。 アイスを食べるはさらなり。 コーラを飲むもなほ、さわやかでをかし。 （どんな状態で何をどうする）もをかし。</p>	<p>●「夏」における表現の仕方を使い、清少納言のものの見方や考え方を想像して書いている。</p> <p>【伝国】（ワークシート）</p> <p>〔生徒の作品例〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・激辛ラーメンで汗をかく。 ・冷房をつけずに熱いキムチ鍋を食べる。 ・作りたての熱いカレーを食べる。
まとめ 1分	7. 「清少納言の表現の工夫②」を確認する。	

第3時の目標

「清少納言の表現の工夫②」を使って「秋」「冬」の表現の仕方を読み取り、清少納言のものの見方や考え方をとらえる。

第3時の展開

	学習活動	指導上の留意点 (○) 評価及び評価方法 (●)
導入 1 0 分	1. ペアで暗唱の練習をする。 2. 全体で教員の音読に続いて即座に復唱する練習をする。	○一人は暗唱する。ペアのもう一人は、教科書を見ながらサポートする。
展開 3 7 分	3. 本時のめあてを確認する。 「清少納言の表現の工夫②」を使って、「秋」「冬」の表現の仕方を読み取ろう。 4. 「清少納言の表現の工夫②」の「一般的に好まれないものを評価する」について「夏」を使って分析シートに記入しながら復習する。 5. 4人組のエキスパート・グループを8つ作る。4グループずつが「秋」と「冬」の分析を担当する。 6. 「秋」2人「冬」2人のジグソー・グループを作り、お互いに分析結果を説明し合う。 7. モデル文の最後（清少納言の表現意図）をジグソー・グループで検討し、グループごとに板書する。 8. 「清少納言の表現の工夫②」を使って、「雲は（第237段）の内容と理由を想像する。 【例】 雲は、(①色)。(②色)。(③色) もをかし。風吹くをりの (④ノーヒント)。	○「さらなり」「もなほ」「も」に着目させる。 ○清少納言の表現意図は残しておき、各グループで想像させる。 ○分析シートの（ ）に入る適語を考えさせる。 ●「春はあけぼの」における表現の仕方から導かれた清少納言のものの見方や考え方を説明している。【伝国】（ワークシート） ○ジグソー・グループや活動内容がわかる物を掲示する。 ○お互いに自分の担当の季節の分析結果を説明させる。 ○ジグソー・グループで考えた答えを、分析シート「夏」に残しておいた（ ）に記入させる。 ○「独自の感覚をアピールしようとした」という観点でまとめる。 ○エキスパート・グループで考えて発表させる。 ○「春はあけぼの」の「春」を参照するようヒントを与える。③から④を連想させる。 ○続きに「月のいと明かき面に薄き雲、あはれなり」と提示されていることを補足する。
まとめ 3 分	9. 全体で「春はあけぼの」を暗唱する。	○教員は小さな声で音読する。

第4時の目標

清少納言の人物像をとらえ、他の題ならどのようなことを書くか想像して書く。

第4時の展開

	学習活動	指導上の留意点（○） 評価及び評価方法（●）
導入 10分	1. ペアで暗唱の練習をする。 2. 全体で暗唱をする。 3. 「清少納言の表現の工夫①（当たり前なものはあえて取り上げない）」と「清少納言の表現の工夫②（一般的に好まれないものを評価する）」を復習して確認する。 4. なぜ「表現の工夫①②」のような表現をしたのかを考える。	○一人は暗唱する。ペアのもう一人は、教科書を見ながらサポートする。 ○教員は小さな声で音読する。 ○掲示物を貼る。 ○ペアで①②を一つずつ説明し合う。 ○②の説明の際には「秋」を例とする。 ○代表ペアにまとめさせる。 ○清少納言が当時の一般的な美意識とは異なった表現をしていることに気づかせる。
展開 37分	5. 本時のめあてを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">「清少納言の人物像」を想像して説明しよう。</div> 6. 各自で「性格シート（レーダーチャート）」の項目を評価し、理由を記入する。 7. グループで「性格シート（レーダーチャート）」と理由を説明し合う。 8. 清少納言の人物像を「(A) だが (B)」と一文で表現する。 9. 異なった表現をしている人物像を発表させて板書し、共通点を整理する。 [例] 知的だが人とは違ったものの見方や考え方を する。 10. 設定した清少納言の人物像から「うつくしきもの」には「(どんな) ちごの顔」を提示したのかを想像しペアで発表し合う。→活用資料集 p.42 で表現を確認する。 11. 清少納言が「つめたきもの」「おそろしきもの」「泣けるもの」という題で書くとしたらどのように表現するかを一文で考える。 [生徒作品例]	○評価項目は、素直さ・教養・表現力・観察力の四観点とする。 ○「表現の工夫①②」から、清少納言が「どのようなものの見方、感じ方、考え方」をしていた人物なのかを想像させる。 ○意見交換しながら自分のシートを赤ペンで修正する。 ○ワークシートに記入させる。 ●清少納言の人物像を根拠を明確に書いている。 【書く】（ワークシート） ○「ちご」がかわいいことは共通認識であることを前提として考えさせる。 ○生徒の反応を拾い、清少納言の人物像につなげて返す。 「わかるわけない」→「ひねくれてるよね」 ○グループで一題選択し一人一文を考える。 ○全員分の文章をつなげて紙に書き、グループの作品とする。 ○想定した「清少納言のものの見方、感じ方、考え方」

	<p>「おそろしきもの」 いつも優しい人。技術の進化。何が起ころるか わからない現実。自分の欲。</p> <p>12. 全体場で各グループごとに発表する。</p>	<p>に沿って表現するにはどうしたらよいかを考えさせる。 ●自分なりに想像した清少納言の人物像で意欲的に表現しようとしている。 【関・意・態】(ワークシート)</p> <p>○教員は、「独特なものの見方や考え方」を評価するコメントをする。</p>
ま と め 3 分	<p>13. 「清少納言が書く文章の魅力」としてまとめを行う。</p>	

【参考文献】

有働裕(2015)「教材としての『春はあけぼの』—『枕草子』初段の冒頭を読むということ—」愛知教育大学国語国文学研究室『国語国文学報』73巻：25-33

池田重信(1983)「古典に親しませる—『枕草子』の授業—」『月刊国語教育』3巻9号,東京法令出版：72-77

岩崎淳(1993)「比較読みによる古典学習—『枕草子』と『徒然草』—」『月刊国語教育』13巻6号,東京法令出版：32-35

浮橋康彦(1986)「古典学習の作業化—『枕草子』第一段『春はあけぼの』—」『月刊国語教育情報』第3巻12号,国語教育情報センター：122-125

桑田泰佑・勝山謙一(1991)「枕草子（春はあけぼの）」北川茂治『新学習指導要領 中学校国語科の指導事例集 第3巻 「古典」の理解と表現』明治図書：69-81

小森潔(2011)「国語教育の中の『枕草子』」小森潔・津島知明編『枕草子 創造と新生』翰林書房：268-286

津島知明・中島和歌子編(2010)『新編 枕草子』おうふう

藤本宗利(1984)「空白への視点—『春は曙』の読みをめぐって—」紫式部学会『むらさき』第21輯：33-41

藤本宗利(1997)「枕草子の新しい読み—随筆からの解放—『春はあけぼの』を中心に—」『月刊国語教育』第17巻1号,東京法令出版：70-74

増田知子・吉田裕久・山元隆春他8名(2013)「新学習指導要領の下での授業実践—伝統的な言語文化の学習における小・中・高の連関について(2)—」広島大学学部・附属学校共同研究機構『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第41号：109-114

水戸敏子(1987)「古典を読み深めるための作文指導『春はあけぼの(枕草子)』(中三)」『実践国語教育研究』別冊,明治図書：97-104

文部科学省(2008)『小学校学習指導要領』

文部科学省(2008)『中学校学習指導要領』

文部科学省(2009)『高等学校学習指導要領』

文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版

渡辺春美(2007)「中学校における『枕草子』の学習指導」渡辺春美『戦後における中学校古典学習指導の考究』溪水社：229-250

和田征文(1986)「教材の構造を踏まえた問いの設定『枕草子』」『実践国語研究』60号,教育出版センター：72-77

【使用した教科書】

三省堂「現代の国語 2」平成28(2016).2.20

学校図書「中学校 国語3」平成28(2016).2.20

教育出版「伝え合う言葉 中学国語2」平成28(2016).1.20

東京書籍「新編 新しい国語2」平成27(2016).2.20

光村図書「国語2」平成28(2017).2.5

【使用した教師用指導書】

三省堂「現代の国語2 学習指導書」(発行年月日記載なし)

学校図書「中学校 国語3 教師用指導書 指導事例編」(発行年月日記載なし)

教育出版「伝え合う言葉 中学国語2 教材研究編下」(発行年月日記載なし)

東京書籍「新編 新しい国語2 教師用指導書 研究編下」(発行年月日記載なし)

光村図書「中学校国語 学習指導書2上」平成28(2016).2.25

※本研究は科学研究費助成事業 15K04446『「小学校・中学校・高等学校の共通教材(古文)」の段階的・系統的な指導に関する研究」の助成を受けたものです。